

島根県邑智郡瑞穂町

# 川ノ免遺跡発掘調査報告書

株式会社猫島商店瑞穂工場（ヴァンペールみずほ）建設  
用地造成工事に伴う発掘調査



1996年3月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

巻頭カラー図版



a. 川ノ免遺跡空中写真（南東から）



b. 同 （南から）

## 序

瑞穂町は若者の定住と雇用促進のため、昭和45年より積極的に企業誘致を進めてまいりました。平成2年度に4番目の誘致企業として、広島に本社のある株式会社猫島商店の瑞穂町への進出が決定し、それに伴い、建設予定地内に所在する川ノ免遺跡の発掘調査を実施いたしました。瑞穂町は遺跡の町と言われるように町内各地に多くの埋蔵文化財がありますが、瑞穂町の歴史を証左する資料に乏しく、発掘調査は限られたものしか行われておりません。しかし、今回の発掘調査で本町の古代文化の一端を知ることができました。本報告書は、本来は1993（平成5）年3月に発刊の予定でしたが、ゴルフ場建設に伴う大規模な発掘調査や道路改良に伴う発掘調査が続き、整理作業ができなかったため3年遅れの発刊となりました。ご容赦下さい。

本報告書が郷土の歴史をひもとく一助となり、文化財への理解を深める資料として広く活用されますことを希望します。

最後になりましたが、調査に当たってご指導いただきました広島大学文学部河瀬正利先生、島根県文化財保護指導委員吉川正氏、島根県文化課等多くの先生方、本調査実施および報告書作成にあたって多大なご協力をいただきました株式会社猫島商店はじめ関係各位に厚くお礼申し上げ序に変える次第であります。

平成8年3月

瑞穂町教育委員会

教育長 澤 田 隆 之

## 例　　言

1. 本書は島根県邑智郡瑞穂町大字山田494番地外における株式会社猫島商店瑞穂工場建設に伴い、平成4年1月29日から4月30日にわたって実施した川ノ免遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社猫島商店から委託を受けて、瑞穂町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆・編集は河瀬正利先生の指導で森岡弘典が行った。
4. 本書掲載の図面作図は、森岡弘典及び藤田謙弘が行った。
5. 本書掲載の遺構の撮影は、森岡弘典、藤田謙弘が行い、空中写真及び遺物の撮影は古川健二が行った。
6. 本書に掲載した地形図(第2図)は建設省国土地理院長の承認を得て(承認番号平成7中複第276号)同院発行の25,000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用したものである。
7. 本書7・8及び9・10頁の地形図に表示したX軸Y軸は国土調査法による第三座標系の軸方向である。地形測量図、遺構測量図の矢印は真北を示している。
8. 本書で使用した遺構、遺物の略号は次のとおりである。  
SI—竪穴住居、SD—溝状遺構、SK—土坑、P—ピット、J—縄文土器、Y—弥生土器、  
SU—須恵器、H—十師器、ST—石器
9. 調査記録、出土遺物は瑞穂町教育委員会で保管している。
10. 地形測量図は測地技研株式会社に委託した。

## 川ノ免遺跡発掘調査報告書

### 目 次

#### 序

I. 調査に至る経緯	1
II. 川ノ免遺跡の位置と環境	3
III. 調査の経過	6
1. 今までの調査	6
2. 調査の方法と経過	6
IV. 調査の概要と出土遺物	11
1. 縄文時代の遺物	11
2. 弥生時代から歴史時代の検出遺構と遺物	17
V. まとめ	51

## 図版・挿図・表 目次

- 卷頭カラー図版 a. 川ノ免遺跡空中写真（南東から） b. 同（南から）
- 図版第1 a. 川ノ免遺跡遠景（北西から） b. 同近景（南東から）
- 図版第2 a. 調査地内ビニールハウス設置風景（南東から）  
b. 川ノ免遺跡空中写真（南東上空から）
- 図版第3 a. 調査地北側空中写真（南東上空から） b. 同中央部空中写真（真上から）
- 図版第4 a. 調査地南側空中写真（南東上空から） b. 調査地基本層序（南東から）
- 図版第5 a. S I - 1 検出状況（東から） b. 同完掘状況（南から）
- 図版第6 a. S I - 1 完掘状況（北から） b. S I - 2 検出状況（北東から）
- 図版第7 a. S I - 2 遺物出土状況（北西から） b. 同完掘状況（同）
- 図版第8 a. S I - 3 完掘状況（北から） b. S I - 4 検出状況（南東から）
- 図版第9 a. S I - 4 土壙断面（南東から） b. S I - 4 遺物出土状況（北東から）
- 図版第10 a. S I - 4 完掘状況（北東から） b. S I - 5 検出状況（南西から）
- 図版第11 a. S I - 5 土層断面（南西から） b. 同遺物出土状況（同）
- 図版第12 a. S I - 5 遺物出土状況（南東から） b. 同完掘状況（南西から）
- 図版第13 a. S I - 6 検出状況（北西から） b. 同土層断面（同）
- 図版第14 a. S I - 6 遺物出土状況（西から） b. 同竈状況（南西から）
- 図版第15 a. S I - 6 竈石組状況（西から） b. 同煙道（南から）
- 図版第16 a. S I - 6 須恵器出土状況（南から） b. 同完掘状況（北西から）
- 図版第17 a. S I - 7 検出状況（北西から） b. 同遺物出土状況（同）
- 図版第18 a. S I - 7 完掘状況（北東から） b. S D - 1 遺物出土状況（南から）
- 図版第19 a. S D - 1 完掘状況（東から） b. S D - 2 完掘状況（北西から）
- 図版第20 a. S K - 1 土層断面（南東から） b. S K - 2 土層断面（南東から）  
c. S K - 3 上層断面（南西から）
- 図版第21 a. S K - 4 完掘状況（南西から） b. S K - 6 土器検出状況（東から）  
c. S K - 13 検出状況（南西から）
- 図版第22 a. S K - 13 遺物出土状況（南から） b. 同完掘状況（同）  
c. C 6 調査区土器出土状況（北西より）
- 図版第23 a. 繩文土器（外面） b. 同（内面）
- 図版第24 a. 繩文土器（外面） b. 同（内面）
- 図版第25 a. 繩文土器（外面） b. 同（内面） c. 同（外面） d. 同（内面）  
e. 同（外面）
- 図版第26 a. 繩文土器（内面） b. 同（外面） c. 同（内面）  
d. S I - 1 床面出土弥生土器
- 図版第27 a. S I - 4 床面出土弥生土器 b. 同 c. S D - 1 出土弥生土器

- 図版第28 a. S K - 6 出土弥生土器 b. 包含層出土弥生土器（外面） c. 同（内面）  
 図版第29 a. 包含層出土弥生土器（外面） b. 同（内面） c. 同（外面） d. 同（内面）  
 図版第30 a. 包含層出土弥生土器（外面） b. 同（内面）  
 図版第31 a. 包含層出土弥生土器 b. 同 c. 同  
 図版第32 a. 包含層出土弥生土器 b. 同  
 図版第33 a. 包含層出土弥生土器 b. 同底部  
 図版第34 a. S I - 5 床面出土高環 b. S I - 6 窓より出土土師器 c. 同 d. 同 e. 同  
     f. S I - 6 煙道端部出土土師器  
 図版第35 a. S K - 13出土土師器 b. C 6 調査区出土土師器  
 図版第36 a. 包含層出土土師器 b. 同（环） c. 包含層出土瓶形土器  
 図版第37 a. 包含層出土ミニチュア上器 b. 同 c. S I - 5 出土須恵器（窓）  
     d. S I - 6 出土須恵器（环） e. 同床面出土須恵器（环）  
     f. S I - 7 床面出土須恵器（蓋）  
 図版第38 a. 包含層出土須恵器（高环） b. 同（环） c. S I - 2 出土石器（砥石）  
     d. 同使用痕のある石器  
 図版第39 a. 包含層出土石器 b. 同 c. 同剥片  
 図版第40 a. 発掘調査風景 b. 同 c. 現地説明会風景

第1図 瑞穂町域と川ノ免遺跡位置図	2
第2図 川ノ免遺跡付近遺跡分布図(1:25000)	5
第3図 土層模式図	6
第4図 発掘調査前地形測量図・調査区設定図	7・8
第5図 発掘調査後地形測量図・構造配置図	9・10
第6図 繩文土器実測図①(1:2)	11
第7図 繩文土器実測図②(1:2)	12
第8図 繩文土器実測図③(1:2)	13
第9図 繩文土器実測図④(1:2)	14
第10図 S I - 1 実測図(1:60)	17
第11図 S I - 1 出土遺物実測図(1:3)	17
第12図 S I - 2 実測図(1:60)	18
第13図 S I - 2 出土遺物実測図	18
第14図 S I - 3 実測図(1:60)	19
第15図 S I - 4 実測図(1:60)	19
第16図 S I - 4 出土土器実測図(1:3)	20
第17図 S I - 5 実測図(1:60)	21
第18図 S I - 5 出土土器実測図(1:3)	21
第19図 S I - 6 実測図(1:60)	23

第20図	S I - 6 出土土器実測図 (1 : 3)	24
第21図	S I - 6 出土土器実測図② (1 : 3)	25
第22図	S I - 7 実測図 (1 : 60)	25
第23図	S I - 7 出土土器実測図 (1 : 3)	26
第24図	S D - 1 実測図 (1 : 60)	26
第25図	S D - 1 出土土器実測図 (1 : 3)	27
第26図	S D - 2 実測図 (1 : 60)	27
第27図	S K - 1・2 実測図 (1 : 40)	27
第28図	S K - 3・4・5 実測図 (1 : 40)	28
第29図	S K - 6 実測図 (1 : 20)	29
第30図	S K - 6 出土土器実測図 (1 : 3)	29
第31図	S K - 7・8 実測図 (1 : 40)	29
第32図	S K - 9・10・11・12 実測図 (1 : 40)	30
第33図	S K - 13 実測図 (1 : 40)	31
第34図	S K - 13 出土土器実測図 (1 : 3)	31
第35図	C 6 調査区土器出土状況 (1 : 4)	31
第36図	C 6 調査区出土土器実測図 (1 : 3)	32
第37図	包含層出土弥生土器実測図① (1 : 3)	34
第38図	包含層出土弥生土器実測図② (1 : 3)	35
第39図	包含層出土弥生土器実測図③ (1 : 3)	36
第40図	包含層出土弥生土器実測図④ (1 : 3)	37
第41図	包含層出土土師器実測図① (1 : 3)	38
第42図	包含層出土土師器実測図② (1 : 3)	39
第43図	包含層出土須恵器実測図 (1 : 3)	40
第44図	包含層出土石器実測図① (1 : 3)	41
第45図	包含層出土石器実測図② (1 : 3)	42
第46図	包含層出土石器実測図③ (1 : 3)	43
第47図	包含層出土石器実測図④ (1 : 2)	44
第1表	縄文土器観察表	15
第2表	弥生土器観察表	45
第3表	土師器観察表	48
第4表	須恵器観察表	50
第5表	縄文時代早期土器変遷対照表	53
第6表	島根県内押型文土器出土遺跡一覧表	53
第7表	邑智郡内縄文土器出土遺跡一覧表	54
第8表	邑智郡内弥生土器出土遺跡一覧表	56

## I. 調査に至る経緯

今回調査を実施した川ノ免遺跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字山田491番地外に所在する集落遺跡である。本遺跡は、昭和63年に瑞穂町教育委員会が実施した遺跡分布調査で、少量の土師器を採集したことによりその所在が明らかになり、広く遺跡として知られるようになった。

ところで、広島市に本社のある漬物メーカー猫島商店の業務拡張に伴い、平成2年に遺跡の所在する山田地内に工場進出が計画された。それによると、遺跡の所在する丘陵とその背後の丘陵尾根を掘削して工場用地を造成し、二階建て延べ面積3,587m<sup>2</sup>の工場を建設するというものであった。この建設計画に伴い猫島商店より遺跡の取扱について協議を受けた瑞穂町教育委員会は、島根県文化財保護指導員古川E氏に工場建設予定地内の遺構や包含層の有無及び遺跡の範囲を確認するための試掘調査を依頼した。調査の結果、かなり良好な状態で遺物包含層や遺構が残されており、当初の計画どおり建設計画が進めば、かなり広い範囲において発掘調査を実施しなければならないことが判明した。

この調査結果に基づいて、瑞穂町教育委員会は島根県文化課の指導を受け、猫島商店と遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、他に替わる川地の取得も難しく、また開発協議に基づいて諸手続きが進行している状況の中で、計画の変更はきわめて難しく、発掘調査もやむをえない判断した。しかし、当初の計画どおり造成工事が進められると遺跡のほとんどが消滅することになり、文化財保護法上好ましいことではなく、また、工業川地全面の発掘調査が必要になり、調査期間も相当長期になると推定された。このことから事業計画をよく検討したところ、計画を多少変更することにより調査の範囲を縮小することが可能であり、部分的にはあるが遺跡を保存できることが判明したので再度事業主体の猫島商店と計画変更について協議を行った。協議の結果、進入路の勾配7.4%を8.4%に計画変更し、造成面積を小さくし、工場の敷地以外は駐車場として利用することにより、遺跡の一部を保存することとなった。発掘調査については、当時別の緊急発掘調査を実施中で、その終了予定が平成3年12月であった。それ以降は、積雪期になり調査は不可能なので、平成4年4月以降の雪どけを待って調査をすべく調査体制の充実を図っていたが、工場が平成4年秋より操業するためには、工場建設着手時期は遅くとも5月初旬でなければならないとのことになり、冬期間に発掘調査を実施することになった。

調査に際して最も懸念されたのは、積雪による調査不能な事態が発生する可能性が大であること、また検出した遺構が凍結や霜柱により崩壊し、精査に支障をきたすのではないかということであった。このような懸念を解消するために、大型ビニールハウス2棟で調査区を覆い、発掘調査を実施することとなった。

調査は、平成4年1月29日から4月30日にわたり次の調査体制（当時）で実施した。

調査主体 瑞穂町教育委員会

調査員 森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

調査補助員 藤田睦弘（瑞穂町教育委員会主事）

調査指導 河瀬正利（広島大学文学部助教授）  
吉川 正（島根県文化財保護指導委員）  
川原和人（島根県教育委員会文化課主幹）  
内田律雄（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）  
熱田貴保（島根県教育委員会文化課主事）

事務局 澤田隆之（瑞穂町教育委員会教育長）  
山本忠徳（瑞穂町教育委員会教育課長）  
星野暢子（瑞穂町教育委員会教育課長補佐）  
佐藤 勝（瑞穂町教育委員会教育課長補佐）

発掘作業員 石川義明、漆谷勉、大畠清見、小川スマエ、小鯨米太郎、岸慎也、岸川慎二、国信勇之進、佐田俊之、洲演軍太郎、高川秀夫、田中三二、田中繁人、田中博一、戸津川里美、戸津川孝夫、上佐幸吉、富永ナカヨ、服部幸造、服部肇、久光花枝、日高スエノ、平川正寅、藤川守貴、古川健二、松島利郎、三上覚、森田ユキエ、山中繁登、吉永久子

整理作業 市山真由美、上木和枝、古川健二、小林多恵、森若洋子（瑞穂町教育委員会）

なお、株式会社猫島商店猫島栄通氏、猫島栄秀氏には、発掘調査を円滑に進めるため多大なご配慮とご協力をいただいた。また、調査にあたって松木岩雄氏、足立克己氏（以上島根県教育委員会）、

桑野直夫氏、木邑恂氏、富永公美氏、山本史朗氏、三上憲昭氏、井坂猛氏、奥田真隆氏（以上瑞穂町文化財審議会委員）、山崎順子氏（頃原町教育委員会）、振井久之氏（大和村教育委員会）、森口正和氏（川本町教育委員会）、中田健一氏（石見町教育委員会）、牧田公平氏（邑智町教育委員会）、角矢永嗣氏（羽須美村教育委員会）、宮田健一（津和野町教育委員会）の方々から広範囲なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。



第1図 瑞穂町域と川ノ免遺跡位置図

## Ⅱ. 川ノ免遺跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には標高600~800m中國脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。

この県境に源を発する出羽川は、瑞穂町のほぼ中央域を蛇行しながら南西から北東に向かって流れ、この川羽川へは高水川、亀谷川、岩屋川、高見川など支流が注いでいる。出羽川とその支流には狭小な沖積平野や河岸段丘が形成されており、田所、出羽、高見付近では比較的幅広い段丘が存在する。これらの段丘は高位と低位の二段に分けられ、高位段丘は河床からの比高50mで砂、シルトの互層を含む疊層によって構成され、疊はくされ疊である。低位段丘は20~30mの比高を有し、厚さ5m以下の砂疊層から成る。段丘面の形成時期は明確ではないが、高見段の原の低位段丘面上には、砂疊層を覆っている一瓶起源の雲南輕石、池田輕石や姶良Tn火山灰がみられ、雲南輕石は約5万年前の噴出と考えられていることから、低位段丘の形成時期はそれより古いとされている。また瑞穂町田所から出羽にかけてはかなり広い出羽盆地が形成されており、今回調査した川ノ免遺跡はこの出羽盆地の東端に位置し、瑞穂町役場から主要地方道吉田瑞穂線を高原方面に約1.2km進んだ右側段丘上に所在する。標高は約310m、遺跡の北側を東流する川羽川からの比高は約20mである。

ところで、瑞穂町内の遺跡は『島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』や『瑞穂町内遺跡分布図』によれば、現在約560か所以上確認されている。その多くが中世から近世、近代にかけての製鉄遺跡であるが、時期的には旧石器時代から、歴史時代にいたる遺跡も数多く所在する。

旧石器時代の遺跡では、横道遺跡<sup>(高見)</sup>、や荒槻遺跡<sup>(岩屋)</sup>があげられる。また近年中国横断自動車道の工事に先行して調査された堀田上遺跡<sup>(市木)</sup>でも、旧石器時代に遡る石器が確認されている。横道遺跡は、出羽川ぞいの低丘陵上に位置し、1982年の詳細分布調査で、丘陵頂部において姶良Tn火山灰の下から流紋岩製石核、剥片類が出土している。遺構等は明らかでないが、後期旧石器時代前半の石器群が存在するものと思われる。また、県内で初めて発掘調査による旧石器時代文化層が確認された遺跡もある。

つぎに縄文時代の遺跡では横道遺跡、長尾原遺跡<sup>(下龜谷)</sup>、大畠遺跡<sup>(大草)</sup>、人字根遺跡<sup>(伏谷)</sup>、野田西遺跡<sup>(上龜谷)</sup>、牛塚遺跡<sup>(上龜谷)</sup>や中国横断自動車道工事に伴って調査された郷路橋遺跡<sup>(市木)</sup>、堀田上遺跡など町内各地で遺跡が明らかになりつつある。横道遺跡では縄文時代早期の押型土器、織維土器、縄文時代前期の刺突文、条痕文土器や石鐵、スクレーパーなどが出土している。大畠遺跡は縄文時代前・中期、人字根遺跡は後・晚期の遺跡といわれているが、詳細については明らかでない。なお、郷路橋遺跡では縄文時代早期から晚期の上器や石器、住居跡と考えられるピット群を出土している。また、堀田上遺跡は、丘陵の南側緩斜面から縄文時代早期の住居跡や押型土器、石鐵、磨石、石皿、凹み石などが出土しており、縄文時代になると町内の各地で人々が生活はじめたことがうかがえる。

弥生時代の遺跡には、野田西遺跡、牛塚原遺跡、淀原遺跡<sup>(淀原)</sup>、順庵原遺跡<sup>(下龜谷)</sup>、馬場山遺跡<sup>(下龜谷)</sup>、長尾原遺跡、滑遺跡<sup>(山田)</sup>、石堂遺跡<sup>(利和)</sup>、賀茂山遺跡<sup>(高見)</sup>、段の原遺跡<sup>(高見)</sup>などが知られている。弥生時代前期から中期かけての遺跡としては牛塚原遺跡、順庵原

遺跡、堀田上遺跡、長尾原遺跡、淀原遺跡などが知られており、1975年、1993年に調査された長尾原遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡が発見されている。竪穴住居は直径6mの円形を呈し中央部にピットを設けている。これらの遺跡は、出羽盆地の南側丘陵上に位置しており、弥生時代の農耕生活が、沖積地をのぞむ湧水地点に近いところからはじまったことを示しているといえる。

弥生時代後期になると、川ノ免遺跡に隣接する滑遺跡をはじめ多くの遺跡が出羽川の両岸に位置する段丘上や流域各地に分布するようになる。1991年に発掘調査がなされた馬場山遺跡では、2×1間の規模の掘立柱建物6棟、1×1間の掘立柱建物1棟からなる掘立柱建物群が確認されている。また、この馬場山遺跡、順庵原遺跡に隣接して、西隅突出型墳丘墓の順庵原1号墓が築かれている。この墳丘墓は、10×8mの規模で墳丘上には箱式石棺墓2基、木棺墓1基の3つの主体がつくられており、主体内部や墳丘周囲の溝からガラス小玉や弥生土器が出土している。墳丘裾には貼石が巡らされ、周溝内にはストーン・サークル状遺構も見られる。このような墳墓の出現は、農耕社会の進展とともに階層分化が始まった結果、共同体の首長墓としての墳墓が築かれたことを示している。また、御華山墳墓（鷲淵）は、長さ2.8m、幅1.5mの墓坑の中に箱式石棺が築かれており、人骨や弥生土器が出土している。いずれも弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓と推定される。

古墳時代になると遺跡はさらに増えてくる。集落関係の遺跡は、長尾原遺跡、順庵原遺跡、宇山遺跡（上原）、狼原遺跡（和田）、今佐屋山遺跡（市木）などがある。1968年に調査された長尾原遺跡では、3棟の竪穴住居跡や土坑墓などが発見されており、製鉄に関する遺構も検出されている。また、1989年に調査された今佐屋山遺跡からも古墳時代後期の竪穴住居跡3棟と製鉄遺構1基が検出されている。いずれも方形で壁の一辺にはカマドが設置されている。製鉄炉跡は、1号竪穴住居の少し手前にあり、炉床部と土坑からなる。遺構の検出状況や炉内残留洋から炉形は隅丸長方形で規模は長さ45cm、幅38cmの箱形炉と推定される。

古墳は60基以上確認されている。古墳時代前半期の古墳と推定されるものは20基以上からなる鷲淵古墳群（鷲淵）や御華山古墳群などがある。いずれも直徑10m前後の円墳や方墳で、中には無墳丘のものもあるといわれる。小形の竪穴式石室を内部構造とする段の原古墳（高見）も古墳時代前半期のものと思われる。古墳時代後半になると、丘陵斜面に横穴式石室を内部埋葬施設とする直径10m前後の円墳が築かれている。牛塚古墳群（上龜谷）、杉谷古墳群（下龜谷）、石堂古墳群（和田）、長尾原A古墳群（下龜谷）などがある。また、江迫横穴墓群（淀原）などのように、丘陵斜面に横から穴を掘りこんで墓室をつくった横穴墓もつくられてくる。

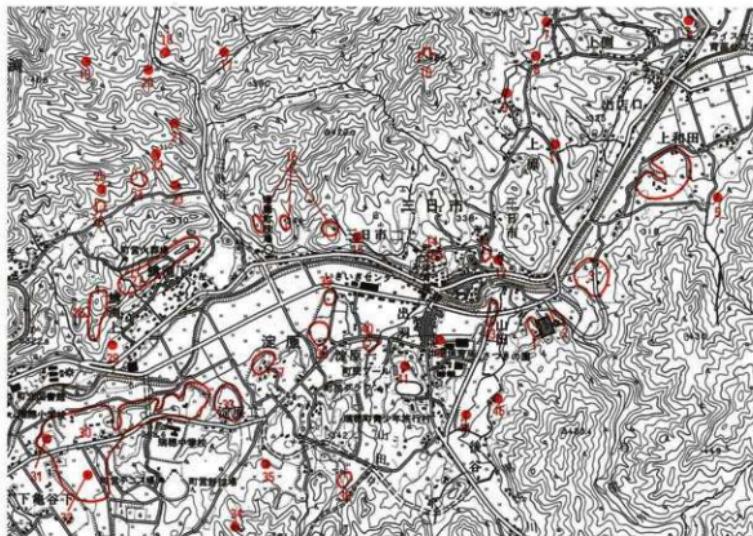
このほか、古墳時代後半から平安時代かけての須恵器窯跡も数多く分布する。青少年旅行村グラウンド窯跡（出羽）、江迫窯跡（淀原）、後鉄穴窯跡（淀原）、石井追窯跡（三日市）、上管窯跡（鷲淵）など20基ちかくに及んでいる。これらの窯跡は久永古窯跡群と呼称されており、島根県有数の須恵器の生産地であったことが知られている。

歴史時代の遺跡としては、古代の須恵器窯跡の他、中世の山城跡や製鉄遺跡がある。山城では鎌倉時代に富永氏（出羽）氏が築城したといわれる二ツ山城跡をはじめ高橋氏の本城、別当城跡など多くの山城や砦跡が確認されている。また中世の製鉄関係遺跡では、製錬場である鉛跡や人銀冶屋跡が数多く分布し、その数は約300か所以上にも及ぶ。また、砂鉄採集の鉄穴場跡、切羽跡は町内全域に分布しており、製鉄が盛んに行われたことがうかがえる。

註

- (1). 島根県『都道府県土地分類基本調査-川本・大朝』 1977年。
- (2). 島根県教育委員会『島根県遺跡地図 II(石見編)』 1992年3月。
- (3). 瑞穂町教育委員会『瑞穂町内遺跡分布図 I・II・III・IV・V』 1985, 1986, 1990, 1991, 1992年。
- (4). 河瀬正利『接道遺跡-詳細遺跡分布調査報告-』 瑞穂町教育委員会 1982年。
- (5). 吉川正「瑞穂町の遺跡」『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会 1976年。
- (6). 島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査-』 1991年3月。
- (7). 瑞穂町教育委員会『長尾原遺跡発掘調査報告書 I』 1994年3月。
- (8). 瑞穂町教育委員会『いにしえの瑞穂-水名カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査概報-』 1995年3月。
- (9). 前掲図 8
- (10). 島根県教育委員会『郡路橋遺跡』『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 III』 1991年3月。
- (11). 瑞穂町教育委員会『馬場山遺跡発掘調査報告書』 1991年。
- (12). 門脇俊彦「頤庵原1号墳について」『島根県文化財調査報告書』第7集 島根県教育委員会 1971年。
- (13). 門脇俊彦「御華山弥生式墳墓調査概報」 瑞穂町教育委員会 1969年2月。
- (14). 門脇俊彦「農免道路新設に伴う長尾原遺跡及び長尾原1号墳調査概報」 島根県川本農林土木事務所 1969年2月。
- (15). 瑞穂町教育委員会『鷺浦4号墳他発掘調査報告書』 1994年3月。

なお、上記参考文献以外に『瑞穂町誌』第1集 1964年、第2集 1966年を参考にした。



第2図 川ノ免遺跡付近遺跡分布図 (1 : 25000)

1. 川ノ免遺跡	10. 毛城跡	19. 桜ヶ谷窯跡	28. 御華山古墳群	37. 淀原遺跡
2. 滑遺跡	11. 宇山B遺跡	20. 定入遺跡	29. 竹前遺跡	38. オセド遺跡
3. 狼原遺跡	12. 七神社石棺墓群	21. カニケ追遺跡	30. 長尾原遺跡	39. 小稔堂遺跡
4. 野田原遺跡	13. 宮ノ谷遺跡	22. 馬場ヶ谷窯跡	31. 長尾原A古墳	40. 福音寺跡
5. 長畠古墳	14. 崇聖寺遺跡	23. 馬場ヶ谷A遺跡	32. 長尾原B古墳	41. 斎行村グラウンド窯跡
6. 稲岡八幡宮跡	15. 蛇喰遺跡	24. 馬場ヶ谷B遺跡	33. 若林遺跡	42. 出羽代官所跡
7. 鉄穴原鉢跡	16. 丹田古墳群	25. 清ヶ尻窯跡	34. 江迫窯跡	43. 座光坊遺跡
8. 宇山A遺跡	17. 上曾窯跡	26. 清ヶ尻遺跡	35. 江迫横穴群	44. 鉄穴内遺跡
9. 宇山窯跡	18. 定入窯跡	27. 豊潤古墳群	36. 沢陸遺跡	45. 小谷遺跡

### III. 調査の経過

#### 1. 今までの調査

今回調査を実施した川ノ免遺跡は、昭和63年の分布調査によりその所在が明らかになった遺跡である。遺跡の範囲は明らかでなかったので、今回その取扱いについて協議を受けた瑞穂町教育委員会は、遺跡の範囲や遺物包含層の有無を確認するため、平成2年11月10日～12月3日にかけて第一次調査を実施した。

調査に先立ち、段丘上の畑に  $2 \times 2$  m の試掘区を 10m 間隔に設定し、背後の丘陵斜面に  $10 \times 1.5$  m,  $6 \times 1.5$  m の試掘区を任意に設定した。

調査の結果、竪穴住居跡、柱穴状の落ちこみとともに多く遺物が出土し、段丘上の広い範囲に遺跡が分布していることが明らかとなった。

基本層序は、おおむね表土(耕作土)、褐色土、明黒色土、黒色土(黒フク)、黄褐色土(地山)で、明黒色土、黒色土層に遺物が集中している。

遺物は、縄文時代早期の押型文土器をはじめ、弥生時代から古墳時代、奈良、平安時代にいたる土器が出土しており、調査の結果、段丘一帯に集落遺跡が存在することが判明した。

また、段丘背後の丘陵部にも遺跡があったと推定されるが、近世の鉄穴流しと戦後の開墾で完全に破壊されていた。

#### 2. 調査の方法と経過

冬期間の調査のため、雪と雨による調査の遅延対策および霜と凍結による遺構の破壊を防止するため、調査区に間口 9 m、長さ 45 m の大型ビニールハウス 2 棟を設置し調査を実施した。

測量は地形測量図を 200 分の 1、検出した各遺構の実測図及び上層図は 20 分の 1 のスケールで作成することとした。また、ビニールハウス内での調査を勘案し、便宜的に南北(縦軸)を A～D、東西(横軸)を 1～9 とし  $7 \times 7$  m の調査区を設定した。

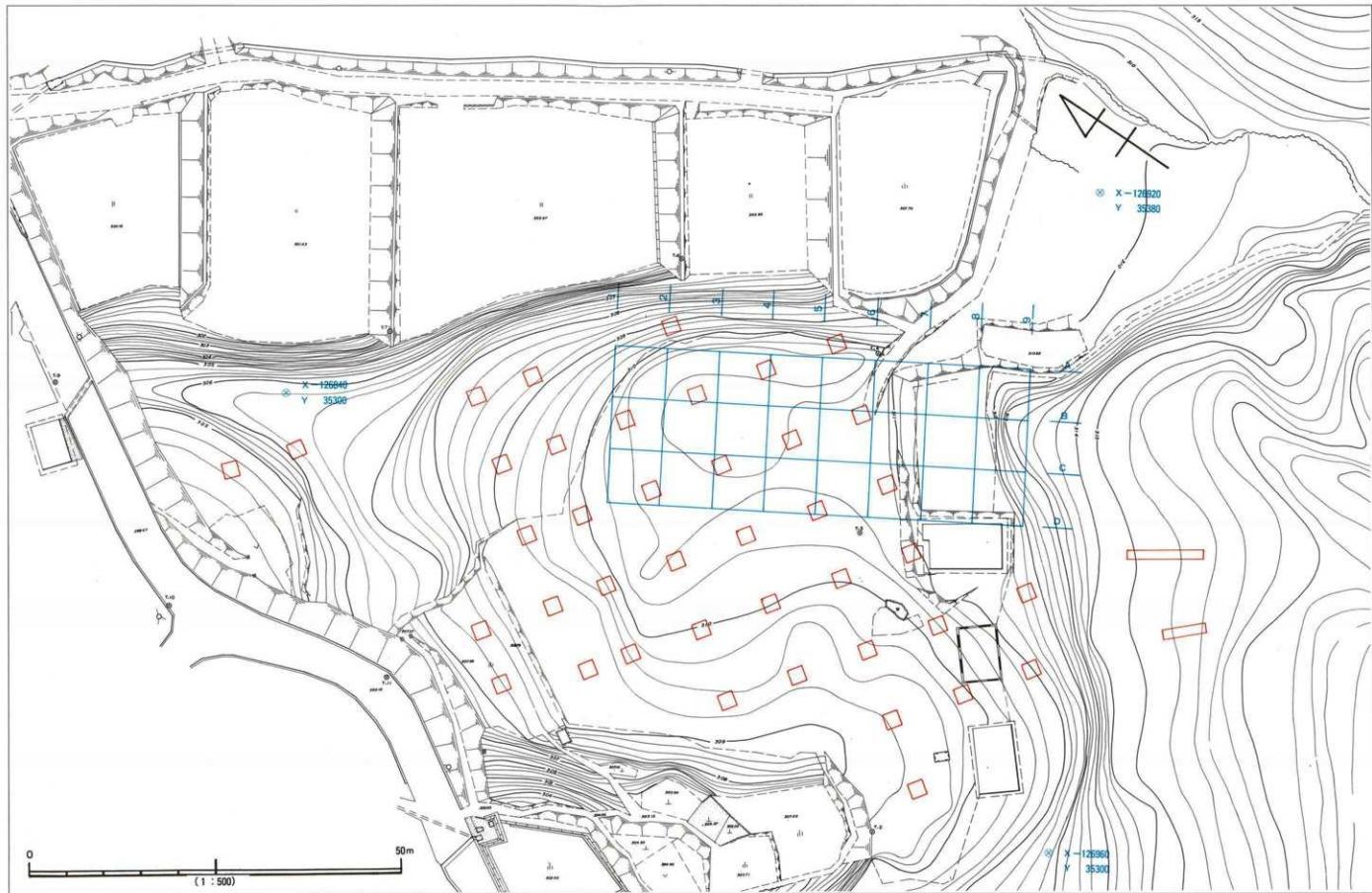
調査順序は、ビニールハウスを設置した C1～C9、A1～A9 を降雪量の最も多い 2 ～ 3 月初旬に、B1～B9 は 3 月中旬から 3 月末にかけてそれぞれ遺構の検出を行い、比較的天候の安定した 4 月に全体の精査を実施した。



第3図 土層模式図

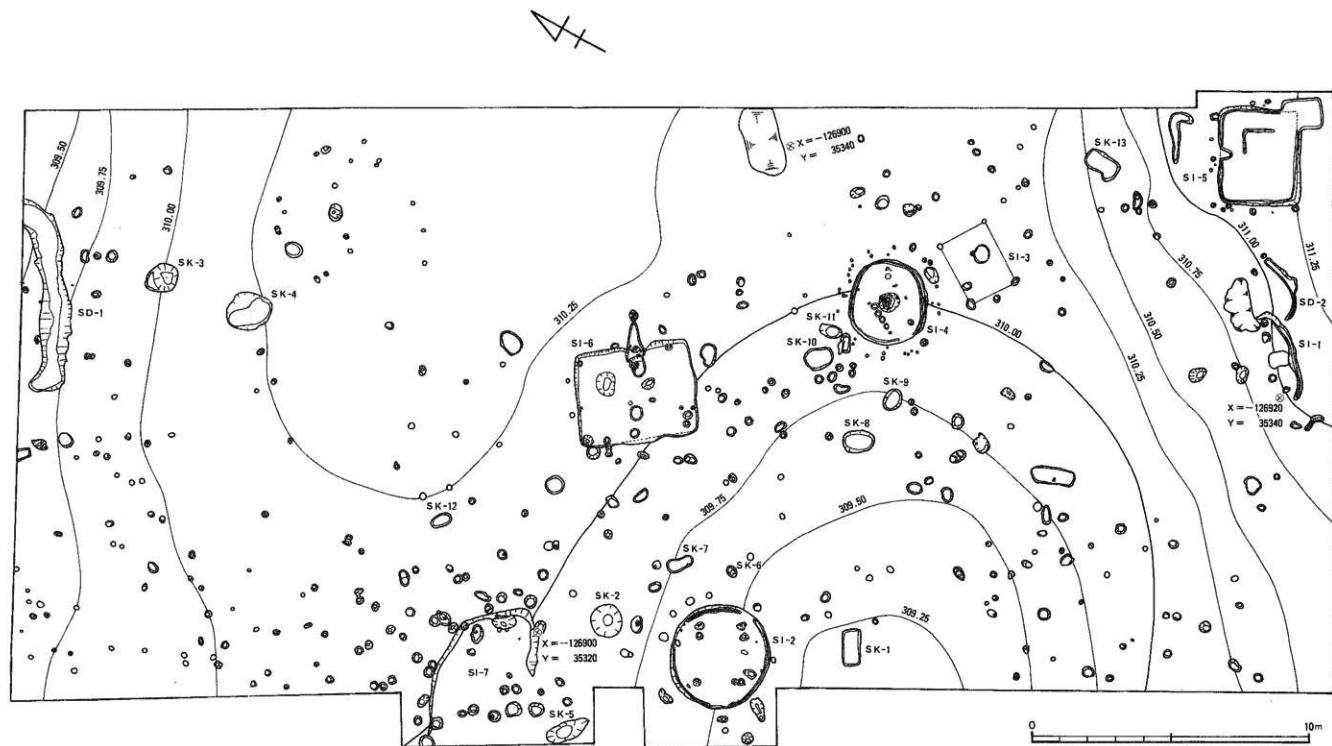


ビニールハウス内の発掘調査風景



第4図 発掘調査前地形測量図・調査区設定図

□調査区 □試験区



第6図 発掘調査後地形測量図・遺構配置図

## IV. 調査の概要と出土遺物

川ノ免遺跡は、出羽盆地の東端に位置し、出羽川が形成した河岸段丘上に所在する。調査により住居跡7棟、溝状遺構2か所、土坑12穴、土坑墓1基、ビット多数を検出した。また、遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器等が出土しているが、量的には弥生土器が最も多い。

### 1. 縄文時代の遺物（第6～9図、図版第23a～26C）

調査区北側のB4、B5、C1、C4、C5調査区を中心に45点の縄文土器が出土したが、縄文時代の文化層や遺構は検出できなかった。

出土した土器は早期に属し、文様などの特徴でI類 押型文系土器、II類 撫糸文系土器、III類 条痕文系土器、IV類 無文で纖維が混入している上器と大きく4つに分類することができる。

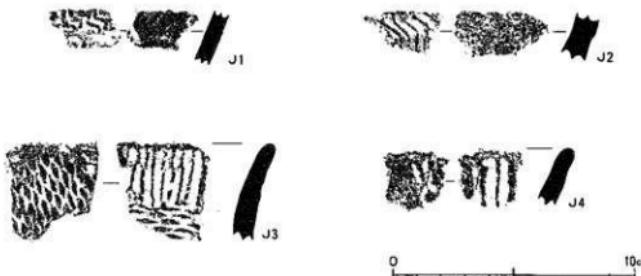
さらにI類の押型文系土器は、シャープな山形押型文（J1・2）や径3～7mm程度の小型楕円が施文されている黄鳥系土器Ia類（J3～21）と径10mm以上の粗大な楕円が施文されている高山寺系土器Ib類（J22～32）、变形山形文土器Ic類（J33）に区分することができる。

Ia類には、口縁内面に細い平行短線があるものや、格子目状に楕円文が巡らされているものと一般的な楕円文がある。Ib類には、胎上に纖維を含んだ粗大楕円文土器や口縁内面に太い斜行沈線が施されたものがある。Ic類の範疇に入るものに、表面に粘土紙を貼付た降帶を有し、その下に縦線、口縁内面に横位の鈍角な变形山形押型文を有する波状口縁の土器がある。

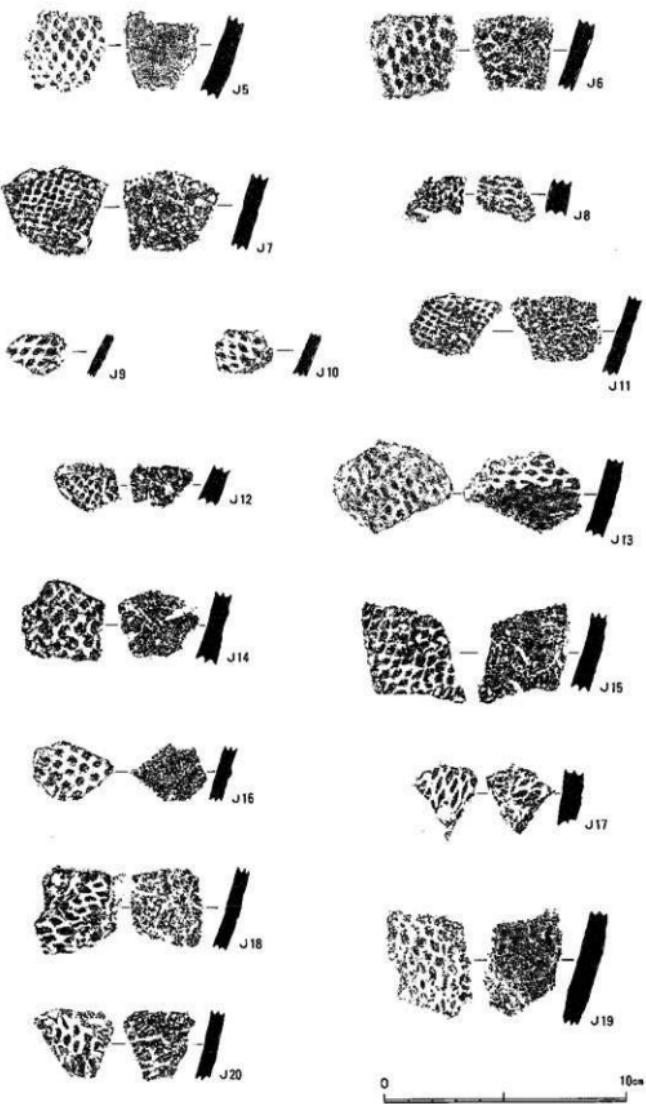
II類（J34・35） 撫糸文系土器は器壁が厚く、胎上に纖維を含み、撫りの粗い撫糸が回転施文されている。

III類（J36～42） 条痕文系土器は器壁が厚く、貝殻により表裏両面に条痕調整が施され、胎上には纖維を含むものが8点出土しているが1個体であると思われる。

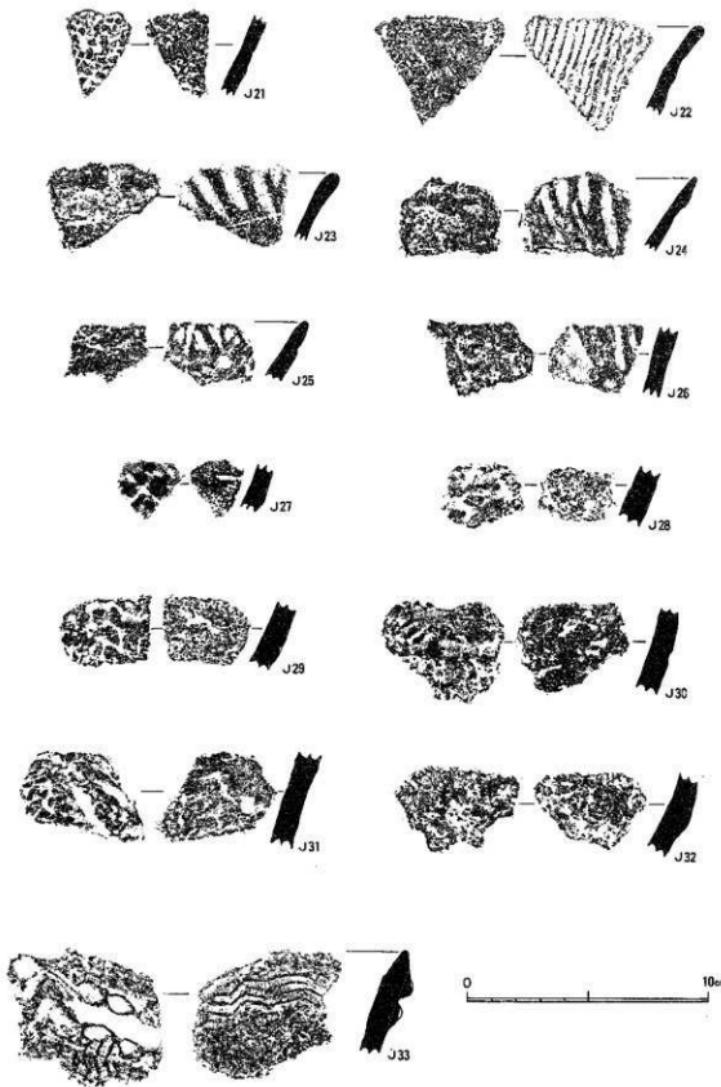
IV類は無文土器で胎土に纖維を含み、器壁は8mm程度の薄いもの（J43・44）と、12mm程度の厚いもの（J45）に分類できる。



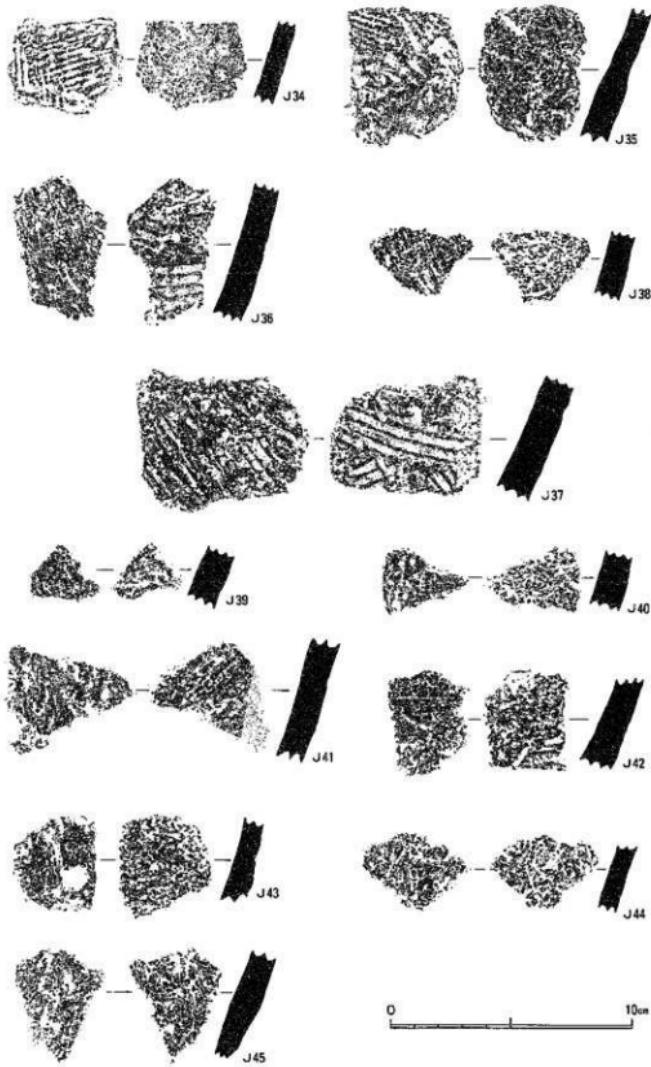
第6図 縄文土器実測図①(1:2)



第7図 縄文土器実測図② (1 : 2)



第8図 摺文土器実測図③ (1:2)



第9図 繪文土器実測図④ (1 : 2)

第1表 繩文土器観察表

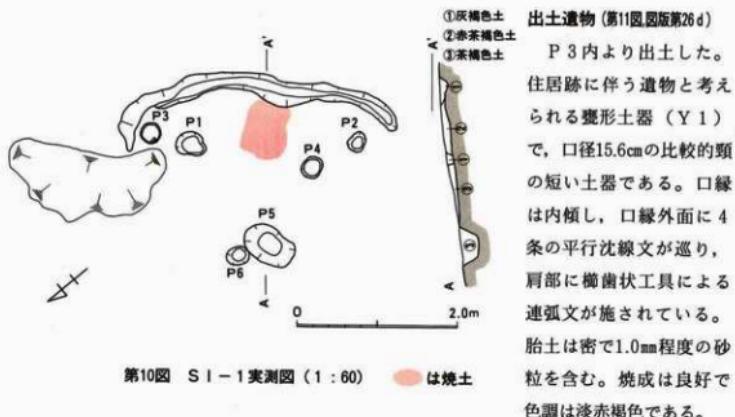
遺物 番号	通 番号	写 真版	出 土位 置	土 層	部 位	文様の特徴・調整	胎 土	色 調	備 考
J 1		C 5	黒色土	胴	(外) シャープな山形押型文	微砂粒含む	(内) 淡黄褐色 (外) 赤橙色		
J 2				胴	(外) シャープな山形押型文	1 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 茶色		
J 3		C 5	黒色土	口縁	(内) 口縁に楕円押型文の後 2.3 cm の平行短線(外) 楕円押型文	3 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 暗灰色		
J 4		B 4	黒色土	口縁	(内) 平行短 (外) 径 6 mm 大の円形押型文	微砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 淡茶褐色		
J 5		C 4	黒色土	胴	(内) ナデ (外) 格子目状押型文	2~3 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 赤橙色		
J 6		B 4	黒色土	胴	(内) 6×4 mm の楕円押型文 (外) 6×4 mm の楕円押型文	1 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J 7		C 4	明黒色土	胴	(内) ナデ (外) 径 3 mm 大の円形押型文	密	(内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色		
J 8		B 4	黒色土	胴	(内) 3×2 mm 大の楕円押型文 (外) 3×2 mm 大の楕円押型文	微砂粒を含む	(内) 灰黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J 9		C 4	明黒色土		5×4 mm 大の楕円押型文	2~3 mm 大の砂粒を含む	(内) 灰黄褐色 (外) 赤橙色	部位不明	
J 10		C 4	明黒色土		6×4 mm 大の楕円押型文	2 mm 大の砂粒含む	(内) 灰黄褐色 (外) 淡黄褐色	部位不明	
J 11		C 3	黄褐色土地山	胴	(外) 3 mm 大の円形押型文	微砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 暗灰褐色		
J 12		C 4	明黒色土	胴	(外) 3 mm 大の円形押型文	微砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 暗灰褐色	11と 同一個体	
J 13		C 3	黄褐色土地山	胴	(内) 5×3 mm 大の楕円押型文 (外) 5×3 mm 大の楕円押型文	1~2 mm 大の砂粒を含む	(内) 黄褐色 (外) 黄褐色		
J 14			表 採	胴	(内) ナデ (外) 6×5 mm 大の楕円押型文	微砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 淡橙色		
J 15		B 4	明黒色土	胴	(内) ナデ (外) 6×3 mm 大の楕円押型文	微砂粒を含む	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色		
J 16		C 4	明黒色土	胴	(内) ナデ (外) 5 mm 大の円形押型文	1 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 淡橙色		
J 17		C 4	明黒色土	胴	(内) 6×3 mm 大の楕円押型文 (外) 6×3 mm 大の楕円押型文	1 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡橙色 (外) 灰黄褐色		
J 18		C 4	明黒色土	胴	(外) 6 mm 大の楕円押型文	1 mm 大の砂粒を含む	(内) 灰色 (外) 灰黄褐色		
J 19		B 1	試 摘	胴	(内) ナデ (外) 6×5 mm 大の楕円押型文	1~2 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色	試 D 7	
J 20		C 4	明黒色土	胴	(内) 6×5 mm 大の楕円押型文 (外) 6×5 mm 大の楕円押型文	1~2 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J 21		B 5	黒色土	胴	(外) 5×3 mm 大の楕円押型文	微砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J 22		C 5	黒色土	口縁	(内) 斜行短線 (外) ナデ	1 mm 大の砂粒と繊維を含む	(内) 赤橙色 (外) 赤橙色		
J 23		C 1	黄褐色地山	口縁	(内) 9 mm 幅の斜行沈縫	2 mm 大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色		

遺物番号	標印番号	写真版	出土位置	土層	部位	文様の特徴・調整	胎土	色調	備考
J24		C 1	黄褐色地山	口縁	(内) 9 mm幅の斜行沈線	2 mm大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色	23と 同一個体	
J25		C 1	黄褐色地山	口縁	(内) 斜行沈線	2 mm大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色	23と 同一個体	
J26		C 1	黄褐色地山	口縁	(内) 斜行沈線	2 mm大の砂粒を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 灰黄褐色	23と 同一個体	
J27		C 4	明黒色土	胴	(内) ナデ。 (外) 11×9 mm大の梢円押型文	1 mm大の砂粒を含む	(内) 橙色 (外) 橙色		
J28		B 5	黒色土	胴	(外) 10×6 mm大の梢円押型文	2 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 赤橙色 (外) 赤橙色		
J29		B 4	明黒色土	胴	(内) ナデ (外) 11×8 mm大の梢円押型文	2 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 淡黄褐色 (外) 赤橙色		
J30		B 4	明黒色土	胴	(外) 剥れた梢円押型文	5 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 淡茶褐色 (外) 淡茶褐色	SI-6 埋土中	
J31		B 1	試掘	胴	(外) 剥れた梢円押型文	3 mm大の砂粒を含む	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色	試B 6	
J32		C 1	黄褐色地山		(内) ナデ (外) 7×5 mm大の梢円押型文	3 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 灰黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J33			試掘	口縁	(内) 変形山形押型文 (外) 2条の隆起と変形山形押型文	5 mm大の砂粒を含む	(内) 赤褐色 (外) 灰黄褐色	試D 7	
J34		C 1	黄褐色地山	胴	(外) 摺糸原体による圧痕	4 mm大の砂粒を含む	(内) 灰黄褐色 (外) 灰黄褐色		
J35		C 5	黒色土	胴	(外) 摺糸原体による圧痕	4 mm大の砂粒を含む	(内) 灰黄褐色 (外) 淡茶褐色		
J36		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色		
J37		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J38		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J39		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J40		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J41		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J42		B 5	黒色土	胴	(内) 具殻による条痕文 (外) 具殻による条痕文	6 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色	36と 同一個体	
J43		B 5	黒色土	胴	(内) 無文 (外) 無文	5 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 黄褐色 (外) 淡橙色		
J44		B 5	黒色土	胴	(内) 無文 (外) 無文	5 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 暗黄褐色 (外) 暗橙色		
J45		C 5	黒色土	胴	(内) 無文 (外) 無文	4 mm大の砂粒と繊維を含む	(内) 淡灰色 (外) 淡灰色		

## 2. 弥生時代から歴史時代の検出遺構と遺物

### S I - 1 (第10図、図版第5 a ~ 6 a)

B 7 区に位置する竪穴住居跡である。この場所は北に向かってやや傾斜している。また、以前住宅地として造成されており、北側の壁や壁溝のほとんどが消滅している。残存している壁高は約8cmで57°の傾きをもつ。壁溝は幅約14cm、深さ5cmで、残存部から推定すると一辺が3.4×3.4mの隅丸方形であったと推定される。また、南側壁面に接して70×50cmの焼土面が検出された。ピットは6個検出され、柱穴と思われるのがP 1, P 2である。P 4は中央ピットと思われる。



第10図 S I - 1 実測図 (1 : 60)

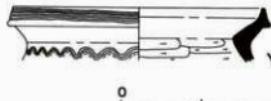


0 2.0m

●は焼土

### S I - 2 (第12図、図版第6 b ~ 7 b)

C 4 区の南側に向かって延びる緩斜面に位置する竪穴住居跡である。住居跡南側は壁溝を残すだけでは消滅している。北側の残存壁高は70cmで約70°の傾きがある。



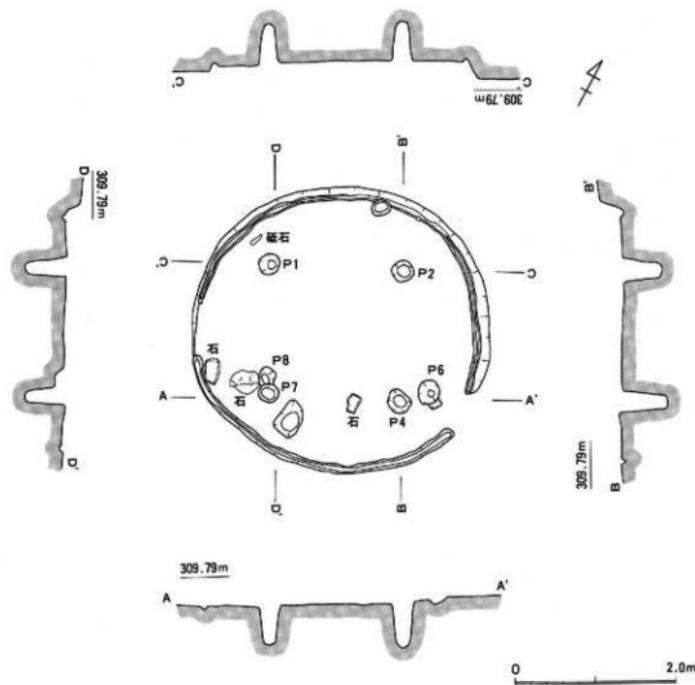
第11図 S I - 1 出土遺物実測図 (1 : 3)

ある。壁溝は幅5~10cm、深さ約6cmである。

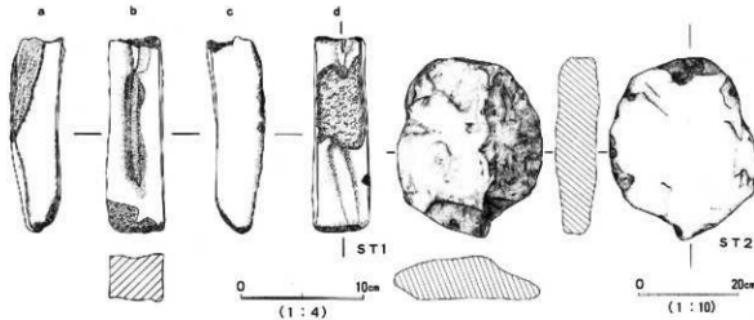
平面形は、長径約3.7m、短径約3.6mの円形住居跡で、床面はほぼ水平をなし床面積は9.1m<sup>2</sup>である。検出されたピットは7個で、柱穴はP 1, P 2, P 3, P 4と考えられ、床面からの深さはP 1 = 52cm, P 2 = 48cm, P 3 = 48cm, P 4 = 57cmで、それぞれの柱の間隔は約1.6mではほぼ正方形である。

**出土遺物 (第13図、図版第38 c + d)**

住居跡北側壁溝付近で土器3点が出土したが、小片のため図化できなかった。また、P 1の西側20cmの床面直上より砥石(ST 1), P 3西側より用途不明の石器(ST 2)が出土した。ST 1は大きさは長さ約16cmで、材質は砂岩である。形状は石斧に酷似しているが、断面は長辺約4.5cm、短辺3.5~3.9cmの長方形を呈している。各面とも使用による磨滅痕が観察されるが、特にa面とc面は磨滅が顕著で光沢を放っている。b面とd面も磨滅が認められるが、a, c面と異なり幅1.3~1.5cm、長さ7~9cmの凹状の磨滅痕が認められる。ST 2は大きさ約35×29cm、厚さ約8cmで形状はほぼ梢円である。材質は花崗岩系岩石で加工痕は認められないが、表裏の平坦面に磨滅痕が認められる。



第12図 S1-2 実測図 (1:60)



第13図 S1-2 出土遺物実測図

S I - 3 (第14図 図版第8 a)

調査区南東のA 5 ~ A 6 区に位置する遺構で、竪穴住居跡と推定される。本遺構の位置するあたりは、以前の進入路工事によりかなり改変されており、その工事の折、遺構壁面等は完全に破壊されたらしく平面形は不明であるが、7個のピットを検出した。

その内、P 1, P 2, P 3, P 4 が柱穴と考えられる。床面からの深さは P 1 = 60cm, P 2 = 50cm, P 3 = 30cm, P 4 = 28cm である。中央東よりの P 5 は中央ピットで大きさは 68 × 56cm、深さ 12cm で内部に焼土が認められ炉と推定される。柱間はそれぞれ約 2.4 × 1.8m で長方形である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

S I - 4 (第15図 図版第8 b ~ 10 a)

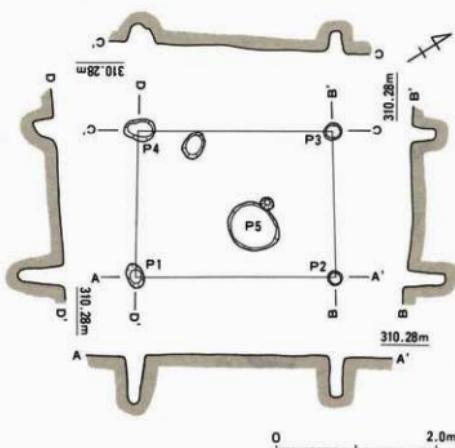
S I - 3 の北西約 1.2m の平坦面に位置する竪穴住居跡である。側壁は完周しており、壁溝も南側の一部を除いてほぼ完周している。残存壁高は最大で 27.0cm、壁の傾きは 79°、壁溝は幅 7 ~ 10cm、深さは 5cm である。

平面形は長径 3.10m、短径 2.75m、床面積 5.8m<sup>2</sup> の円形竪穴住居跡である。床面はほぼ水平で、全面に約 10cm の厚さで貼床が施されている。床面より 6 個のピットと中央部に 72 × 75cm、深さ 17cm の炉が検出された。炉内部には焼けた粘土が認められ、内部は粘土貼りであったと推定される。

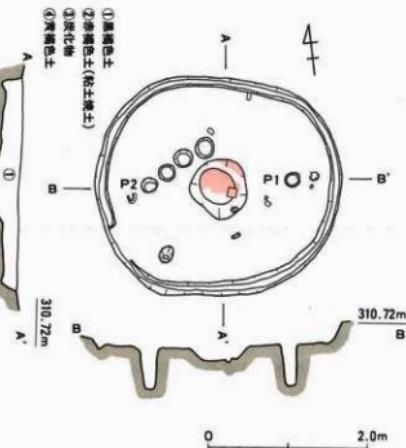
柱穴は P 1, P 2 で、床面からの深さは P 1 = 51cm, P 2 = 53cm、柱間は 1.8m である。その他のピットは深さ 5cm ~ 13cm で性格は不明である。

出土遺物(第16図 図版第27 a・b)

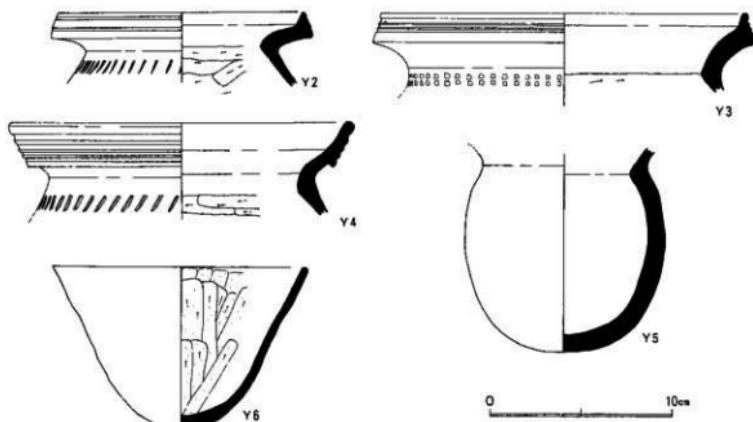
床面直上で出土した土器で示せるのは斐形土器 3 (Y 2, 3, 4) と小形壺形土器 1 (Y 5), 鉢 1 (Y 6) である。Y 2 は口径 13.5cm で口縁は内傾し、外面に 2 条の凹線文が巡り、頸部にはヘラ状工



第14図 S I - 3 実測図 (1 : 60)



第15図 S I - 4 実測図 (1 : 60) ●は焼土



第16図 S I - 4 出土土器実測図 (1 : 3)

具で幅約8mmの斜行刺突文が施されている。調整は口縁部から肩部へかけてヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ頸部以下がヘラ削り調整、焼成は良好、胎土は密で少量の砂粒を含む。色調は淡橙色である。Y 3は口径20cmで口縁は内傾し、外面に櫛歯状工具による3条の沈線が巡り、頸部には櫛歯状工具で刺突文が施され。調整は口縁部から肩にかけてヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、頸部以下がヘラ削り調整、焼成は良好、胎土は密で少量の砂粒を含む。色調は淡橙色である。Y 4は口径18.6cmで口縁は外傾し、外面は4条の凹線文が巡り、頸部にはヘラ状工具で斜行刺突文が施されている。調整は口縁部から肩にかけてヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、頸部以下がヘラ削りによる調整が施されている。焼成は良好、胎土はやや粗で0.5~1.0mmの砂粒を含んでいる。色調は橙色である。Y 5は小形壺形土器で口縁部を欠く。胸部最大径は11.0cmではほぼ球形を呈す。器厚は約1.0cmで調整は内外面ともナデ調整で焼成はややあまく、胎土は0.5~1.0mmの砂粒を含む。Y 6は口径14.9cm、高さ8.7cmの小型の鉢で、外面は風化により調整不明であるが内面はヘラ削り調整が施されている。

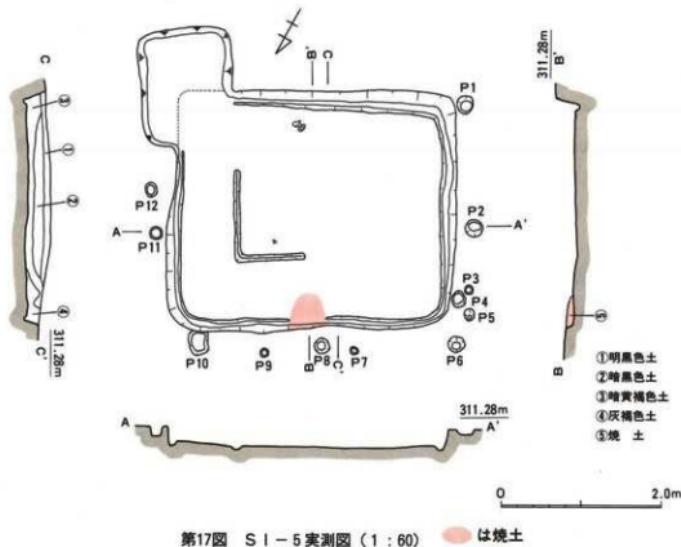
#### S I - 5 (第17図、図版第10b~12b)

S I - 1の東側A 7調査区の平坦面に位置する竪穴住居跡である。この場所は以前住宅のあった所で、住居跡の南東側の一部がその時の搅乱により破壊されているが、側壁および側溝はほぼ完周しており、残存壁高は東西が約19~22cm、南北が約10~26cm、壁の傾きはそれぞれ東側約86°、西側約82°、南側約76°、北側約75°で側溝は幅約5~10cm、深さ約10cmである。平面形は、長径約3.6m、短径約2.9m、面積8.4m<sup>2</sup>の隅丸方形竪穴住居跡である。床面からはピットは検出されなかったが、中央よりやや東側で長さ約1.9m、深さ約5cmのL字形の掘り込みを検出した。また、北側壁面に接して45×38cm厚さ10cmの舌状を呈した焼土を検出したが煙道は設けられていない。住居跡

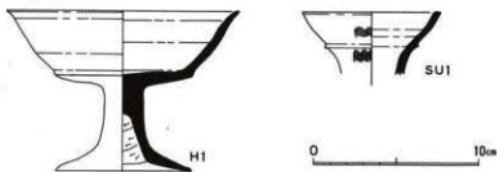
壁面より外側に12個のピットを検出した。その内P1, P2, P6, P8, P11が柱穴と考えられる。柱穴の深さはP1=14cm, P2=5cm, P6=8cm, P8=17cm, P11=12cmである。

#### 出土遺物（第18図、図版第34a・37c）

床面直上で出土した遺物の内、図化できたのは次の2点である。H1は高杯で器高は9.7cm、口径は14.0cmで口縁は外傾し、端部は薄く尖りぎみで坏部下端に明確な稜をもっている。脚部高は5.0cmとやや低く底径は8.2cmである。調整は内外面とも風化しており不明であるが、脚筒内部はヘラ削りである。焼成はやや甘く、胎土は微砂粒を含み色調は淡橙色である。SU1は須恵器の壺であるが、胴部を欠損しており全体は不明である。口径は8.4cmで口縁部はやや内傾するように立上り、端部は平坦に仕上げてある。内外面ともに回転ナデ調整で、口縁部と頸部の境に断面が三角形の凸帯を有し、口縁部および頸部に櫛歯状工具により波状文を施す。焼成は良好、胎土は密、色調は内外面とも青灰色である。



第17図 S I - 5 実測図 (1 : 60) ●は燒土



第18図 S I - 5 出土器実測図 (1 : 3)

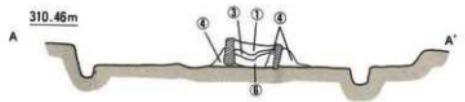
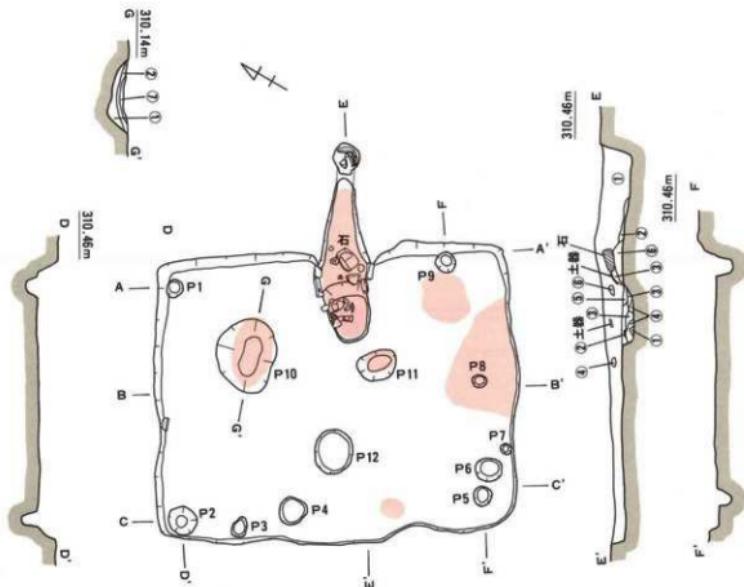
### S I - 6 (第19図、図版第13a～16b)

調査区の中央北側B-4の平坦面に位置するつくり付けの竈と煙道を設けた方形の堅穴住居である。戦後の開拓による耕地化の際、遺構の西および南側は壁面が一部削り取られていたが、全体的には保存状態は良好である。残存壁高は最大37cm、壁の傾きは68°で壁際の壁溝は認められなかつた。平面形は、長径約4.3m、短径約3.6m、床面積13.6m<sup>2</sup>の方形堅穴住居跡である。床面よりピット14個を検出した。そのうち柱穴と推定されるのはP1、P2、P5、P9で、床面からの深さはP1=13cm、P2=6cm、P4=10cm、P5=15cm、P9=19cmである。P10～12はそれぞれ86×70cm、深さ21cm、46×36cm、深さ7cm、53×45cm、深さ7cmで、P10,11からは炭化物と焼土が認められた。また、東側壁面中央部には竈とそれに続く煙道が築かれており、先端には楕円形の煙出しがついている。竈は左右両側にそれぞれ2枚の石を立て粘土で固定されており、石材は花崗岩系岩石で人工的な粗削面が認められる。右側石材は炊口側が約25×35cm、煙道側が約20×35cmで、左側はそれぞれ約23×35cm、約13×30cmの大きさである。竈の前部には70×50cm、深さ14cmの掘り込みが設けられ焼土と炭が検出された。煙道は地山を直接掘り込んで作られた半地下式で、粘土を張って甲が作られており、先端部で厚さ2cmの甲の残骸が確認された。煙道の長さは約1.5mで、幅は竈との接点部で約55cm、先端部30cmと先端にいくにつれて細くなつており壁面は熱を受けた痕跡と煤が付着していた。煙道底部は平坦で、煙出しに向かっては12～13%の勾配で低くなっている。このことは雨水が煙出しから直接竈内に流入するのを防ぐためであると推定される。また煙出し部分から口縁を下にした状態で大型の土師器壺形土器が出土した(H.6)。体部から底部にかけては欠損していたが、煙道部への雨水流入を防止するため、雨天時等に煙出しを塞ぐ目的で使用されたと推定される。

### 出土遺物 (第20・21図、図版第34b～f・37d・e)

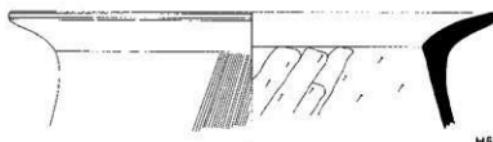
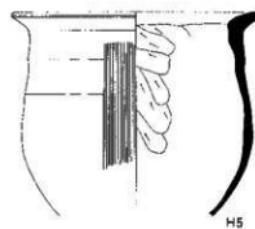
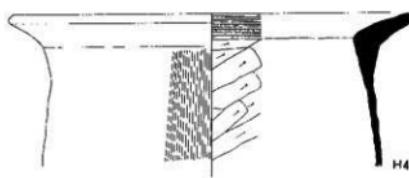
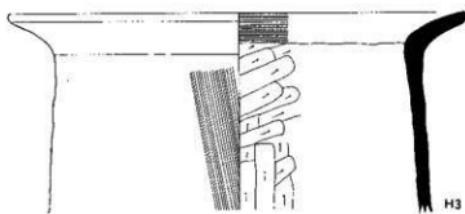
床面直上からの出土で図化できるものは土師器壺形土器4(H.2, 3, 4, 5), 須恵器3(SU.2, 3, 4), 煙出し部より出土した土師器壺形土器1(II.6)である。

H.2, 3, 4, 5は竈前部より出土した土師器壺形土器で、それぞれ口径29.1cm, 28.0cm, 24.2cm, 15.0cmで口縁は緩やかに外傾し端部は丸く仕上げている。外縁調整は口縁部がヨコナデ、体部はハケ日、内面は口縁部および胴部上端がヨコナデ、以下ヘラ削りである。焼成は良好で胎土は密である。SU.2, 3, 4は高台付坏で、SU.2, 3は同一の形態をなし、北側壁面中央付近で重なりあった状態で出土した完形品である。それぞれ口径は13.4cm, 14.7cmで、口縁端部はやや外傾し尖りぎみで、底部外縁を回転ヘラ削りの後ナデ調整をしている。高台は底部外縁にハの字状につき、高台の内側が接地する。切り離しはヘラ切りで、その上をナデ消している。SU.4は口径13.5cmで、口縁はわずかに外傾し、端部は2, 3同様尖りぎみで、高台は底部外縁のやや内側につき高台接地面は外側である。SU.2, 3, 4とも焼成は良好、胎土は密、微砂粒を含み色調は青灰色でロクロビキの痕跡をよくとどめている。H.6は口縁を下にして煙出しを塞ぐ状態で出土した口径29.4cmの大型の土師器壺形土器であるが、近年の耕地化の際、体部以下を欠損したと推定される。口縁はくの字に外傾し外面は口縁部がヨコナデ、胴部がハケ目、内面は口縁部がヨコナデ、以下ヘラ削り、焼成は良好、胎土は密で1mm程度の砂粒を含む。色調は淡橙色である。



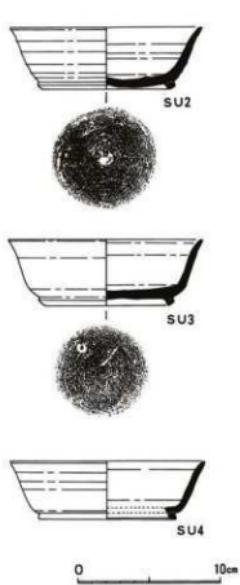
0 2.0m

第19図 SI-6実測図 (1:60) ■は焼土



0 10cm

第20図 S I - 6 出土土器実測図① (1 : 3)



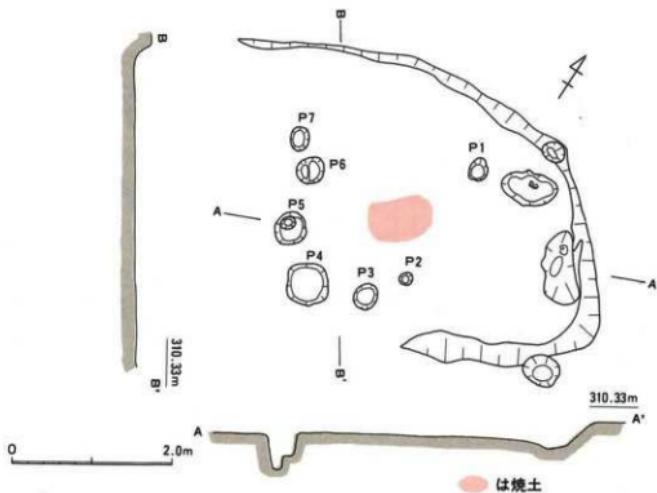
第21図 S I - 6 出土土器実測図② (1 : 3)

S I - 7 (第22図、図版第17 a ~ 18 a)

S I - 2 の北側 C 3 の平坦面に位置する竪穴住居跡であるが、覆土中に住居跡とは別の焼土が認められるので後世に擾乱を受けている可能性がある。遺構の西側が1/2以上消滅していて規模は不明であるが、平面形は平行四辺形状の変形プランを呈している。最大残存壁高は東側で20cm、北側で19cm、壁の傾きはそれぞれ $62^{\circ}$ 、 $45^{\circ}$ である。床面より7個のピットを検出したが住居跡との関係は不明である。

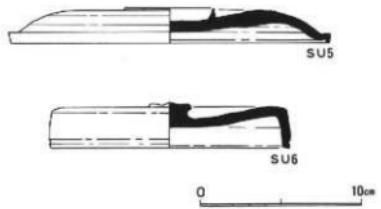
出土遺物 (第23図、図版第37 f)

床面直上より須恵器蓋が出土した。SU 5 は口径19.9cm、高さ2.0cmで中央部に直径5.5cmの輪状のつまみがつく。口縁端部はやや内傾し外側は平坦に仕上げている。焼成は良好、胎土は密で多量に微砂粒を含み色調は青灰色である。SU 6 は口径14.9cm、高さは2.5cmで中央部に直径2.6cmの擬宝珠つまみがつき、口縁端部に1条の沈線が巡らされている。外面は全体に自然釉が付着し、内面は青灰色を呈している。焼成は良好で胎土は微砂粒を含み密である。



第22図 S I - 7 実測図 (1 : 60)

SD-1 (第24図、図版第18b・19a)

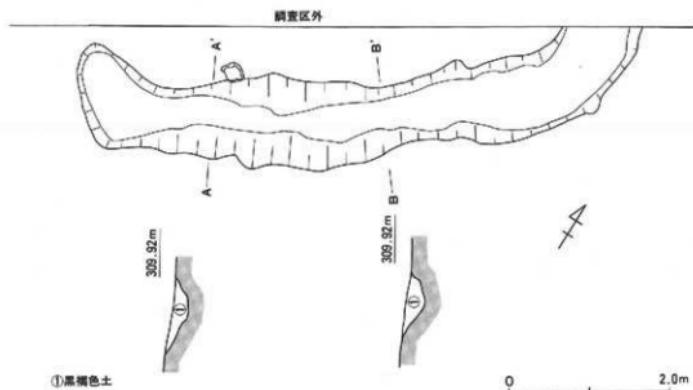


第23図 SD-1出土土器実測図 (1:3)

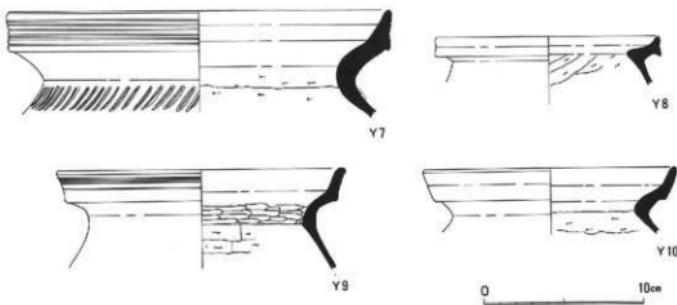
A1からB1調査区にかけて位置する溝状遺構で、平面形は弓状を呈し、長さ約6.9m、幅0.7~1.0m、深さ約25cmで底部は不整形であるがほぼ水平に掘られている。遺構内より出土の土器から弥生時代後期の遺構と推定されるが性格や用途については不明である。

出土遺物 (第25図、図版第27c)

遺構底部や覆土内より細片を含め29点の土器が出土したが、その内遺構直上の土器で図化できるものは4点でいずれも弥生土器の甕である(Y7, 8, 9, 10)。Y7は口径24.0cmで口縁はほぼ直立し、外面に6条の凹線文か沈線を巡らし、頸部にはヘラ状工具で幅約2cmの斜行刺突文が施されている。調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、以下がヘラ削り調整である。焼成はあまく、胎土に1mm程度の砂粒を少量含む。色調は淡橙色である。Y8は口径14.0cmで口縁は直立し、文様は認められない。調整は外面ヨコナデ、内面は口縁部ヨコナデ、以下ヘラ削りである。焼成は良好、胎土は密で少量の砂粒を含む。色調は赤褐色である。Y9は口径18.0cmで口縁は外傾し4条の沈線を巡らし、口縁部から体部にかけてヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、口縁下端から頸部にかけてヘラミガキ、胴部はヘラ削り調整を施している。焼成は良好、胎土は密、色調は灰褐色である。Y10は口径15.9cmで口縁は外傾し、Y8同様文様は認められない。調整は外面がヨコナデ、内面口縁部はヨコナデ、以下がヘラ削りである。焼成は良好、胎土は密で微砂粒を少量含み、色調は外面が明黄褐色で一部炭化物が付着し、内面は灰褐色である。

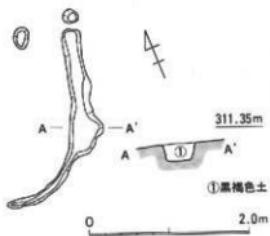


第24図 SD-1実測図 (1:60)



第25図 SD-1出土土器実測図 (1:3)

SD-2 (第26図、図版第19b)



S I - 1 の東側に位置する溝状遺構である。平面形は弓状に弧を描き、長さ約2.7m、幅は最大で40cm、最小10cm、深さ約22cmである。遺構内からは遺物は出土せず、性格や用途については不明である。

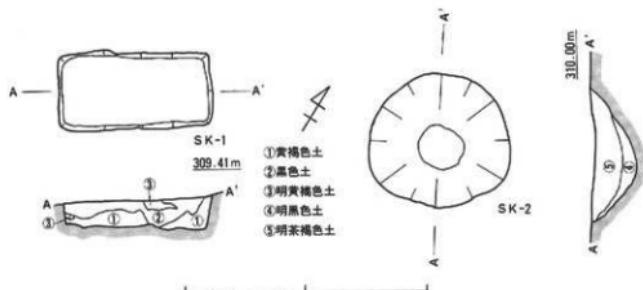
SK-1 (第27図、図版第20a)

①黒褐色土 S I - 2 の南側谷地形底部に位置する。平面形は約1.3×0.7mの長方形でほぼ直角に掘り込んでいる。深さ約20cm、底部は不整形で遺物は出土していない。

第26図 SD-2実測図 (1:60)

SK-2 (第27図、図版第20b)

S I - 2 と S I - 7 のほぼ中間の平坦面に位置する。平面形は約1.1×1.1mの円形で深さは25cmのすり鉢状の土坑である。覆土中より弥生上器と思われる土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。覆土は明黒色土と明茶褐色土に分層でき、明茶褐色土中には少量の黄褐色土ブロックを含む。



第27図 SK-1・2実測図 (1:40)

SK-3 (第28図、図版第20c)

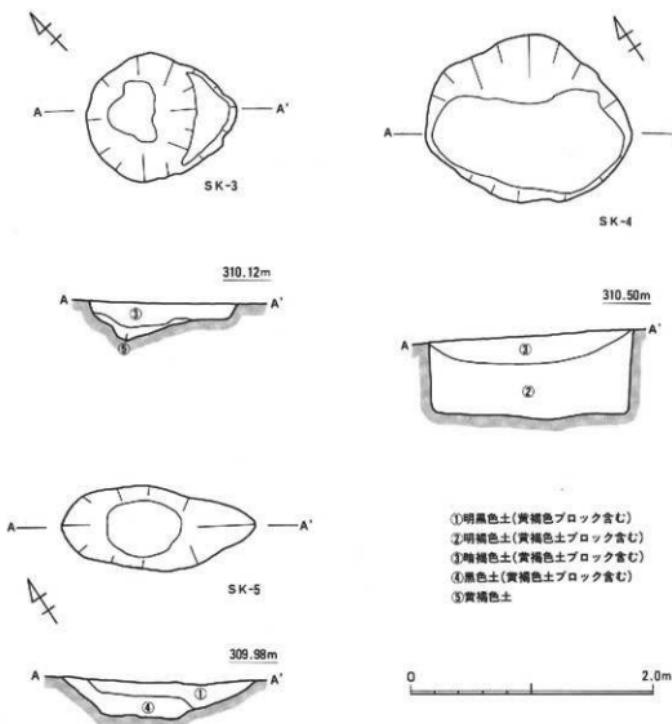
SD-1の南側3mの平坦部に位置する。平面形は約1.2×1.0mの卵形で、地山を2段に掘り込んでいる。1段目の深さは12cm、底部は平坦である。2段目は深さ30cmの尖底で、覆土より土器小片が出土した。

SK-4 (第28図、図版第21a)

SK-3の南側1.5mの平坦部に位置する。平面形は約1.7×1.5mの楕円形を呈し深さは70cmで、長径方向はほぼ直角に掘り込んでいる。底部は平坦で1.6×1.2mの大きさで、本遺跡の土坑の中で最大の規模である。覆土は2層に分層でき、それぞれ少量の黄褐色土ブロックを含む。

SK-5 (第28図)

SI-7の南側2mに位置する船形状をした土坑である。大きさは約1.6×0.7m、深さは30cm、底部は60×45cmの楕円形で平坦である。覆土は2層に分層でき、それぞれ少量の黄褐色土ブロックを含む。



第28図 SK-3・4・5実測図 (1:40)

### SK-6 (第29図、図版第21b)

S I - 2 の東側 1m に位置する。平面形は  $0.45 \times 0.35$ m の卵形で、深さは 16cm である。壁はほぼ直角に掘り込まれ、底部は平坦をなす。遺物は弥生土器で、西南壁際から出土した。土器は口縁の一部と体部の 1/2 以上を欠損しているが、出土状況から推測して、意図的に破壊した後、重ねて土坑内に収納したものと思われる。

### 出土遺物 (第30図、図版第28a)

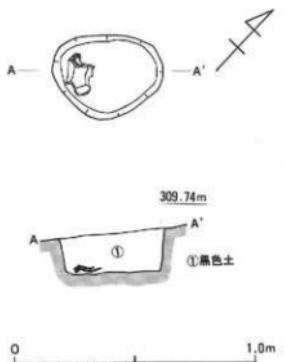
Y 11 は口径 15.4cm で口縁は直立し、外面は 3 条の凹線文が巡り、頸部には二枚目による幅 1.8cm の刺突文が施されている。調整は外面がナデ調整、内面は口縁部がヨコナデ、口縁下端から頸部にかけてヘラミガキ、以下ヘラ削りが施されている。焼成は良好、胎土は密で微砂粒を少量含む。色調は赤褐色である。

### SK-7 (第31図)

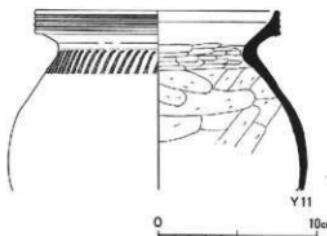
SK-6 の北側 1.3m に位置する。平面形はヒョウタング形で  $0.95 \times 0.3$ m、深さ 18cm である。底部は平坦に掘られており、覆土中から土器の小片が出土した。

### SK-8 (第31図)

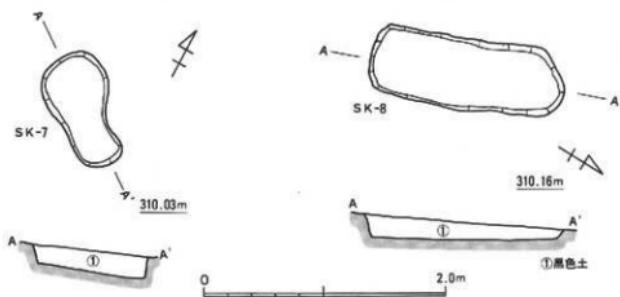
B 6 調査区の緩斜面に位置し、平面形は長方形に近い楕円形で約  $1.6 \times 0.6$ m、深さ 8 ~ 20cm である。底部は平坦に掘られ、覆土中から土器の小片が出土した。



第29図 SK-6 実測図 (1 : 20)



第30図 SK-6 出出土器実測図 (1 : 3)



第31図 SK-7・8 実測図 (1 : 40)

S K - 9 (第32図)

S I - 4 の西側 3m の平坦部に位置する。平面形は楕円形で約  $1.1 \times 0.7\text{m}$ 、深さ 25cm で、底部は平坦に掘られている。遺物の出土はない。

S K - 10 (第32図)

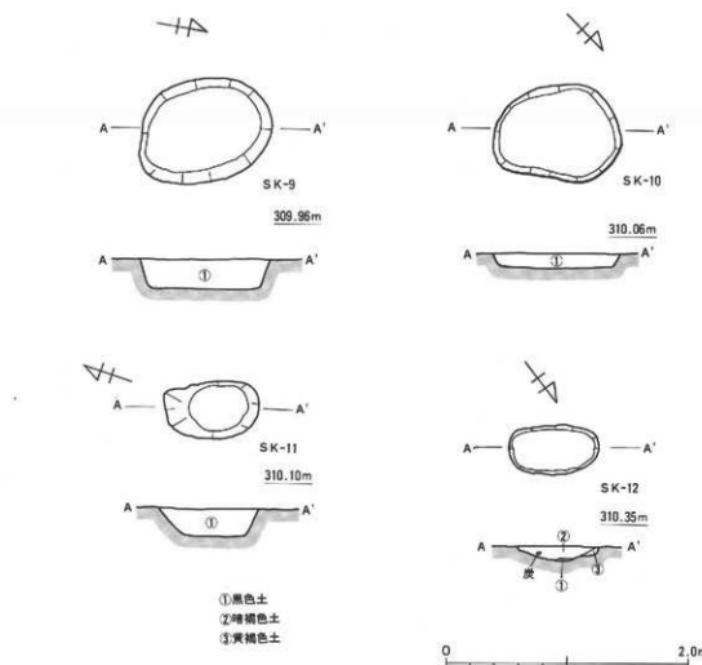
S I - 4 の西 0.6m の平坦部に位置する。平面形は楕円形で約  $1.1 \times 0.8\text{m}$ 、深さ 12cm で、底部は平坦に掘られている。遺物の出土はない。

S K - 11 (第32図)

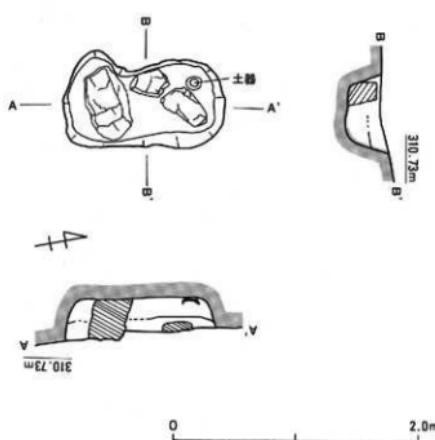
S I - 3 と S I - 4 の中間に位置する。平面形は長方形に近い楕円形で約  $80 \times 40\text{cm}$ 、深さ 23cm、底部は平坦で、覆土中から土器の小片が出土した。

S K - 12 (第32図)

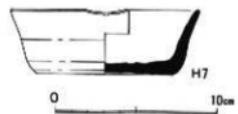
S I - 7 の北東 3.5m の平坦部に位置する。平面形は楕円形で約  $75 \times 40\text{cm}$ 、深さ 13cm である。覆土は 3 層に分層でき、第 1 層の暗茶褐色土中より炭化物が出土したが、土器等の遺物は出土していない。



第32図 SK-9・10・11・12 実測図 (1 : 40)



第33図 SK-13 実測図 (1 : 40)

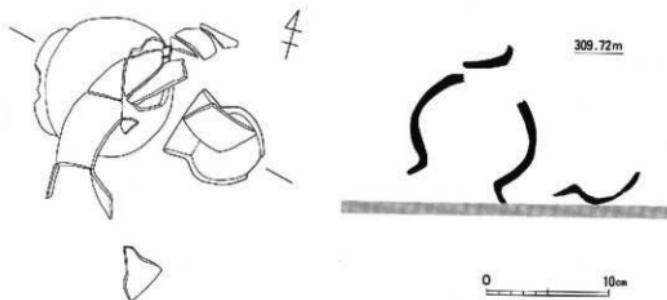


第34図 SK-13出土土器実測図 (1 : 3)

H 7 は土坑墓内の北西壁付近底部より出土した土師器で、口径は11.6cm、器高4.0cmの片口の碗である。口縁部は外傾し、底部外縁にヘラ削りを施しているが、その他は風化により不明である。供獻土器として埋納されたと思われる。

#### C 6 調査区出土遺物について(第35・36図、図版第22c・35b)

H 8, 9, 10は、C 6 調査区中央西寄りの地山上から出土した土師器である。出土状況は口縁部を下にした小型の壺を胴部の欠損した壺の口縁が覆い、その東側に近接して小型丸底壺が置かれている。小型の壺は底部を、小型丸底壺は器形の1/2を欠損している。付近に欠損部片の出土がないことからそれぞれ意図的に



第35図 C 6 調査区土器出土状況 (1 : 4)

#### SK-13(第33図、図版第21c～22b)

S I - 5 の北側3.5mに位置する。北西方向へわずかに傾斜した斜面上に掘られた土坑墓で、平面形は隅丸長方形を呈し主径はN 9° Eである。大きさは約1.3×0.7m、深さ約30cmで、地山を65～80°の角度で掘り込み、底部はほぼ平坦である。土坑内により約30～60cmの大きさの石が3個とほぼ完形の土師器1点出土した。石は人工的に割られた花崗岩系岩石で、墓標石として使用されたものと推定される。

#### 出土遺物 (第34図、図版第35a)

H 7 は土坑墓内の北西壁付近底部より出土した土師器で、口径

は11.6cm、器高4.0cmの片口の碗である。口縁部は外傾し、底部外縁にヘラ削りを施しているが、その他は風化により不明である。供獻土器として埋納されたと思われる。

#### C 6 調査区出土遺物について(第35・36図、図版第22c・35b)

H 8, 9, 10は、C 6 調査区中央西寄りの地山上から出土した土師器である。出土状況は口縁部を下にした小型の壺を胴部の欠損した壺の口縁が覆い、その東側に近接して小型丸底壺が置かれている。小型の壺は底部を、小型丸底壺は器形の1/2を欠損している。付近に欠損部片の出土がないことからそれぞれ意図的に

破損されたと考えられる。また近くより手捏土器も出土しており、祭祀に係る遺物と推定されるが、遺構は検出されなかった。H8は口径8.5cmの壺形土器で、口縁部をくの字に外傾し口縁端部は尖りぎみに仕上げられている。外面口縁部から頸部にかけてはヨコナデ、胴部は熱によりハゼて不明である。内面は口縁部はヨコナデ、胴部は不定方向にナデ調整を施しているが、頸部に指頭圧痕が認められる。H9は口径14.1cmの壺形土器と思われるが、胴部を欠損しているため詳細は不明である。H10は口径6.1cmの小型丸底壺で、口縁端部は薄く尖りぎみである。内外面とも口縁部はヨコナデ、胴部は不定方向のナデ調整を施し、内面胴部には指頭圧痕が認められる。

### 3. その他の遺物

#### 弥生時代前期の土器（第37図、図版第28b・c）

Y12は壺形土器で、口縁部は短く外反する。口縁端部が逆「L」字形を呈し、ヘラ状工具で刻目文を施す。外面頸部にヘラ状工具により7条の沈線を施す。内面はヘラミガキ調整で焼成は良好で態度は密である。また、外面は炭化物の付着が顕著である。

#### 弥生時代中期の土器（第37・38図、図版第28b～30b）

出土量は非常に少なく小片であったが、その内訳化できたのは壺形土器9点、甕形土器9点である。壺形土器は形態や手法の特徴で5類に、甕形土器は2類に分類した。

##### 壺I類（Y13）

口縁が「く」字状にゆるやかに外反し、平坦につくられた口縁端部に斜格子文を施し、頸部に沈線を施したもの。

##### 壺II類（Y14）

口縁が朝顔状に大きく開き、端部は平坦に作られ上下にわずかに拡張する。内外面ともヘラミガキにより丁寧な調整がなされている。

##### 壺III類（Y15・16）

II類と同じく口縁が朝顔状に大きく開く。口縁端部は下へのみ拡張し平坦部に櫛またはヘラ状工具で斜格子文を施すもの。

##### 壺IV類（Y17・18）

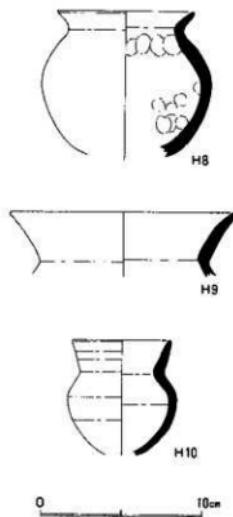
頸部に数条の刻目突起文を有する。内面にヘラミガキが認められる。

##### 壺V類（Y19・20）

頸部または胴部に櫛齒状工具により沈線と列点文を施し加飾なされているもの。

##### 壺VI類（Y21）

口縁端部が「く」字状または逆「L」字状に外反し、頸部に櫛齒状工具により沈線を施し胎土が



第36図 C6 調査区出土土器実測図(1:3)

粗粒なもの。内面にヘラミガキ調整が認められる。

#### 壺II類 (Y22~30)

口縁部が「く」字状に屈曲するが、I類に比べてその角度は鋭く胎土も密である。器肉は薄く、内面はヘラミガキ、外面きハケメにより丁寧に調整されているものが多い。

#### 弥生時代後期の土器 (第38~40図、図版第31a~33b)

本遺跡の中で最も出土量が多い。器種は概ね壺形土器と甌形土器に分類できるが、壺の量が圧倒的に多い。形態的特徴と手法により壺形土器4類、甌形土器6類に分類した。

#### 壺I類 (Y31~33)

口縁が「ハ」字状に内傾し、複合口縁外面に数条の凹線文が施されているもの。頸部にはヘラ状工具により斜行刺突文、内面口縁はヨコナデ、頸部以下はヘラケズリ調整が施されている。

#### 壺II類 (Y34~36)

口縁がわずかに外傾し、複合口縁外面に凹線文が施されているものほか無文のものもある。口縁内面はヨコナデ、頸部以下はヘラケズリ調整が施されている。

#### 壺III類 (Y37)

直線的に立ち上がる比較的長い頸部を有し、口縁端部はやや外傾する。口縁外面は櫛齒状工具で縦位に緩やかな波状文を施すもの。

#### 壺IV類 (Y38~40)

小片であるので器種については明確ではないが本稿では壺として分類する。頸部に櫛齒状工具による数条の沈線や波状文、連弧文等で加飾している。内面はヘラケズリ調整を施している。

#### 壺I類 (Y41~44)

口縁が「ハ」字状に内傾する複合口縁を有する土器で、口縁外面に数条の凹線文や櫛齒状工具による沈線が施されているもの。頸部にはヘラ状工具により斜行刺突文、内面口縁はヨコナデ、頸部以下はヘラケズリ調整が施されており、中には顕著に煤の付着が認められるものもある。

#### 壺II類 (Y45~58)

口縁が直立またはわずかに外傾する複合口縁の土器である。口縁外面に凹線文や櫛齒状工具による4~6条の沈線を施しているが一部無文のものがある。頸部にヘラ状工具で斜行刺突文等が施してあるものが多い。調整は口縁内部がヨコナデ、頸部以下がヘラケズリ調整である。

#### 壺III類 (Y59~62)

複合口縁部は外傾し口縁上端部は丸くつくられているものと、平坦につくられているものがあり、それぞれ器肉は厚い。口縁外面は櫛齒状工具により多条の沈線が施されている。

#### 壺IV類 (Y63~65)

複合口縁が外傾し、口縁上端部は肥厚し丸くつくられている。Y63、65は無文である。64は櫛齒状工具で沈線が認められるが煤の付着が著しいので詳細は不明。

#### 壺V類 (Y66~69)

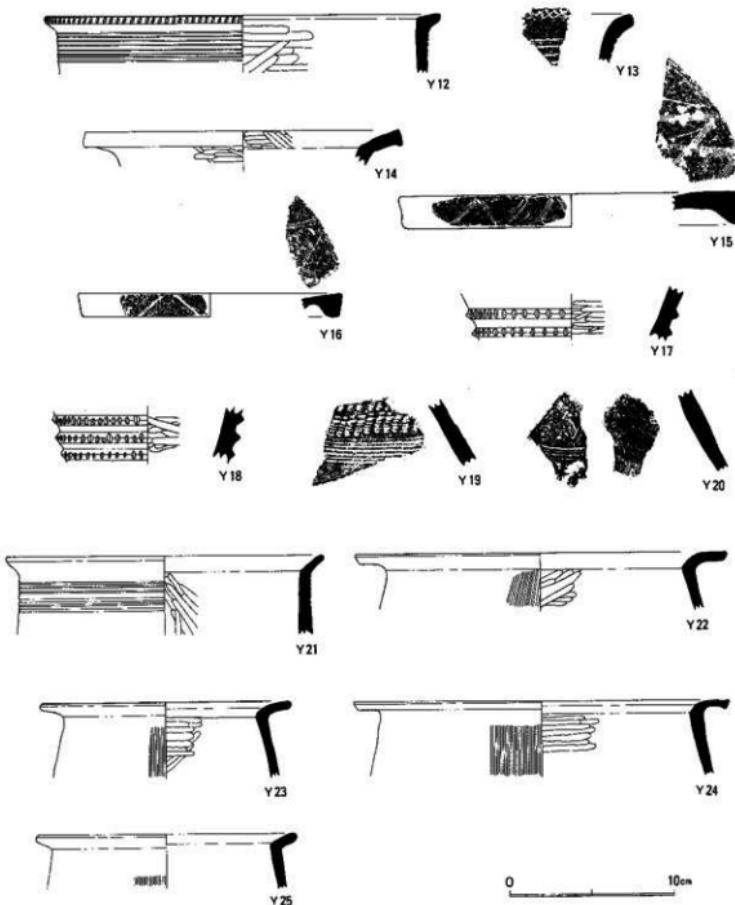
複合口縁が大きく外傾して長く伸び、口縁上部がやや肥厚し丸くつくられているもので、Y66は口縁外面から胴部にかけて櫛齒状工具で沈線が施されている。

甕VI類 (Y70)

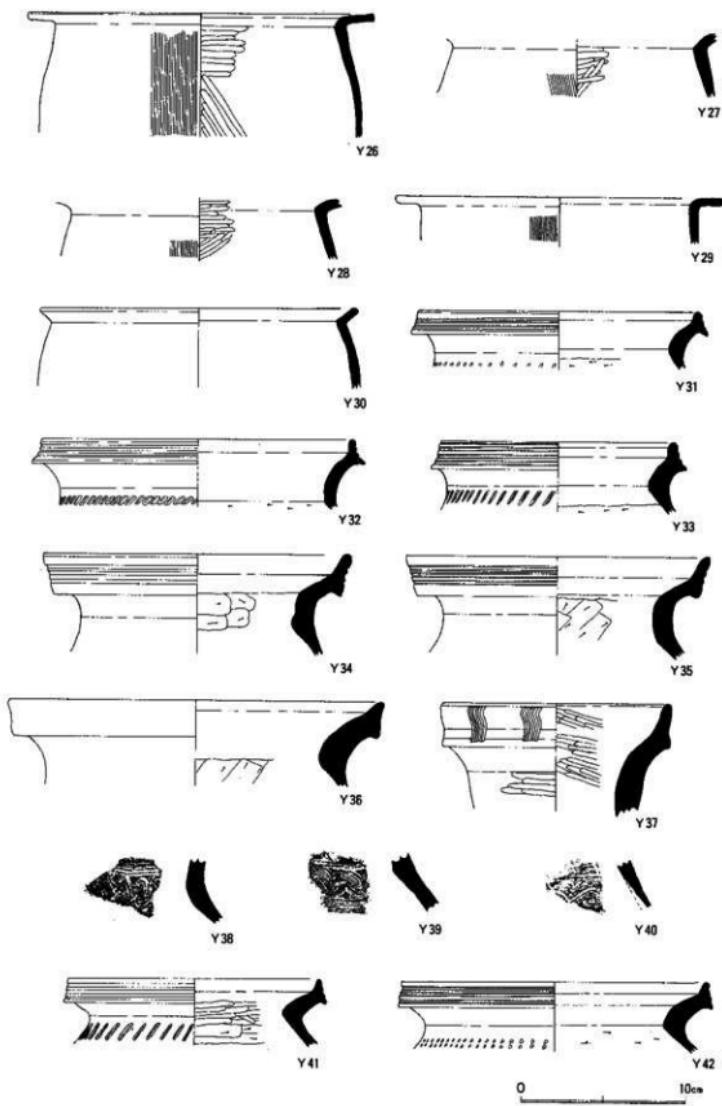
複合口縁が大きく外反し口縁上部がわずかに肥厚し丸くつくられているもの。

底部 (Y71~78)

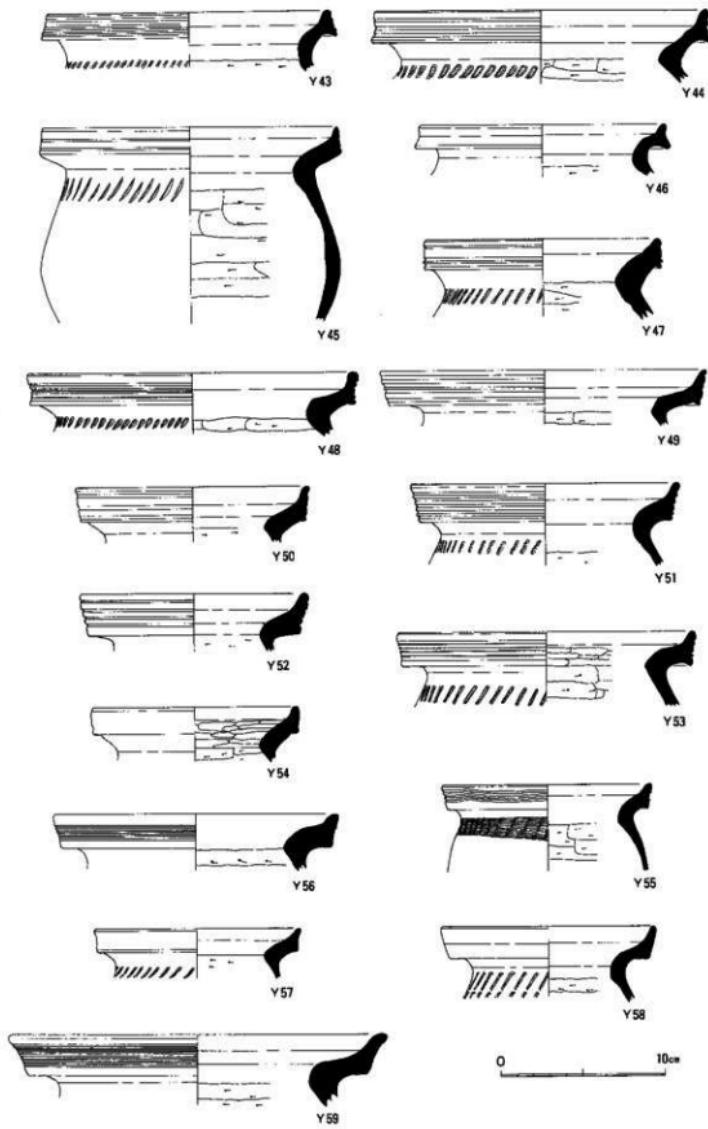
平底のもの1点 (Y71), 上げ底の6点 (Y72~77), わずかに底部が平らなもの (Y78) を図示した。いずれも胴に向かって大きく開くもので、調整は外面がヘラミガキかナデ、内面はヘラケズリである。



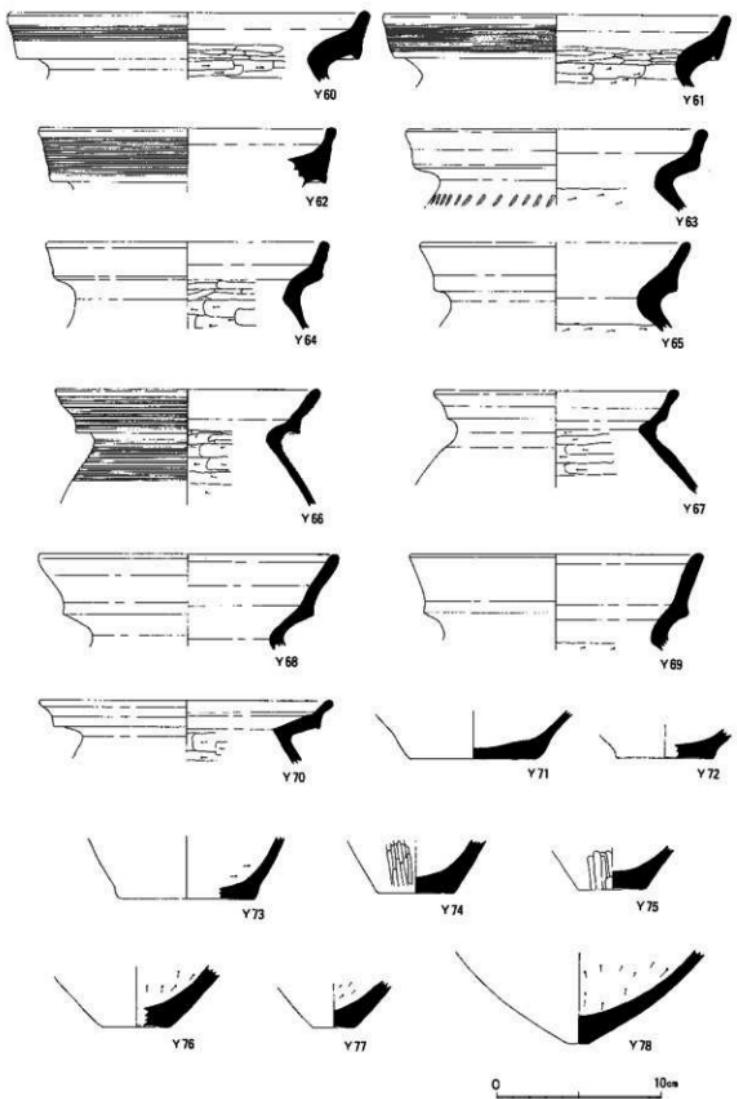
第37図 包含層出土弥生土器実測図① (1 : 3)



第38図 包含層出土弥生土器実測図② (1 : 3)



第39図 包含層出土弥生土器実測図③ (1 : 3)



第40図 包含層出土弥生土器実測図④ (1 : 3)

### 土師器（第41・42図、図版第36 a～37 b）

弥生後期の上器に統いて出土量は多かったが、小片が多く図化できるものはわずかであった。器種は壺形土器、甕形土器、坏、瓶形土器、ミニチュア土器等が出土した。

#### 単純口縁を有する壺形土器、甕型土器

口縁部の形態から2類に分類した。

##### I類（H11～18）

口縁がゆるやかに外反し、胴部の張出しが口縁部以上となるもの。H11は口縁端部がわずかに肥厚化し3条の沈線を施している。近隣に類例が無く搬入品と思われる。H12は口縁端部に平坦面を有し、H13～18は丸くつくられている。

##### II類（H19～20）

口縁は大きく開き、胴部は直線的に立上り、口縁部より張り出さないもの。

#### 碗（H21・22）

H21は半球形をした坏で、調整は風化により明確には分からぬが、内外面ともヘラケズリの後多方向にナテ調整が施されている。H22も21同様半球形をした碗であるが、口唇部がわずかに外傾している。調整は風化により不明である。

#### 瓶形土器（H23）

ほぼ完形で器高は25.1cm、口径26.0cmである。逆「ハ」字状に立ち上がる胴部が中央部あたりから直立し、口縁部はゆるやかに外反する。外面はハケ目、内面はヘラケズリが施されている。底部付近に7mm程度の円孔が穿たれている。把手は認められない。

#### ミニチュア土器（H24～29）

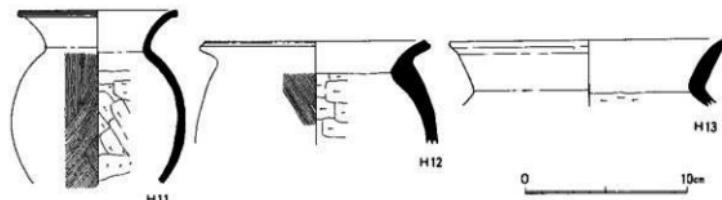
碗形土器、壺形土器に分類できる。これらの土器は実用的に使用されるものではなく、祭祀儀礼等に使用されたものと推定される。

##### 碗形土器（H24～28）

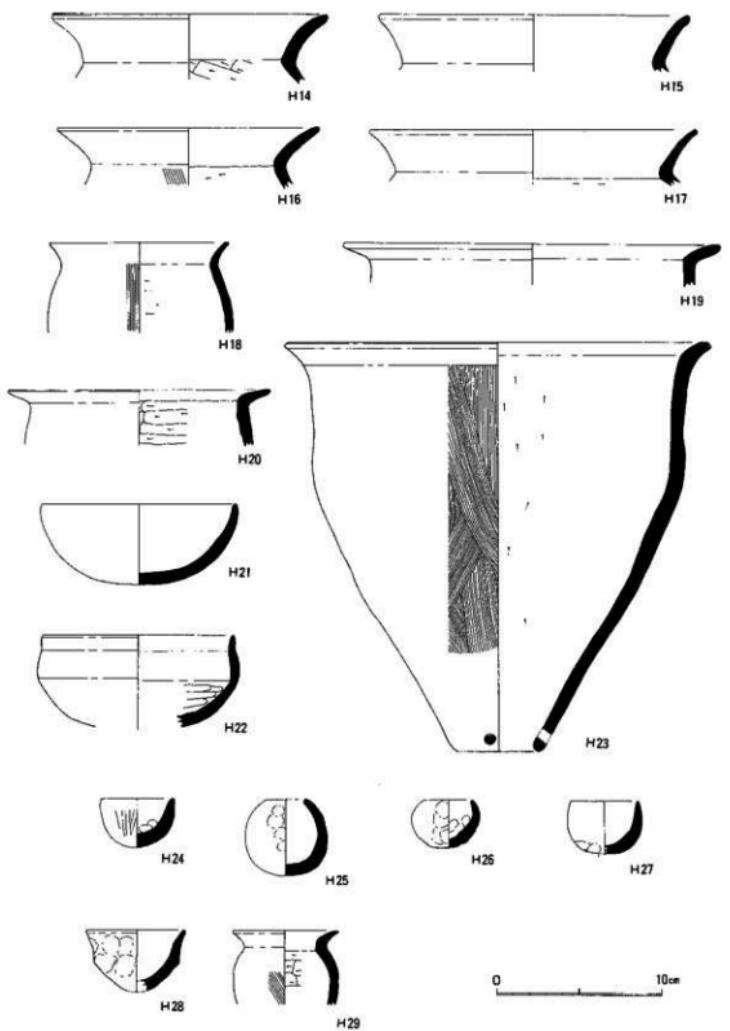
底部は丸底で、口縁部が内湾するものがほとんどであるが、H28はつまみ上げて成形した口縁部がわずかに外反する。相対的につくりは雑で指頭圧痕や指紋が認められるものもある。

#### 壺型土器（H29）

底部が欠損しているが小型丸底壺と推定される。口縁端部はゆるやかに外反し、胴の張出しへは口縁端部とほぼ同じで、外面胴部にハケ目、内面にヘラケズリ調整が認められる。



第41図 包含層出土土師器実測図①（1：3）



第42図 包含層出土土器実測図② (1 : 3)

### 須恵器（第43図、図版第38 a・b）

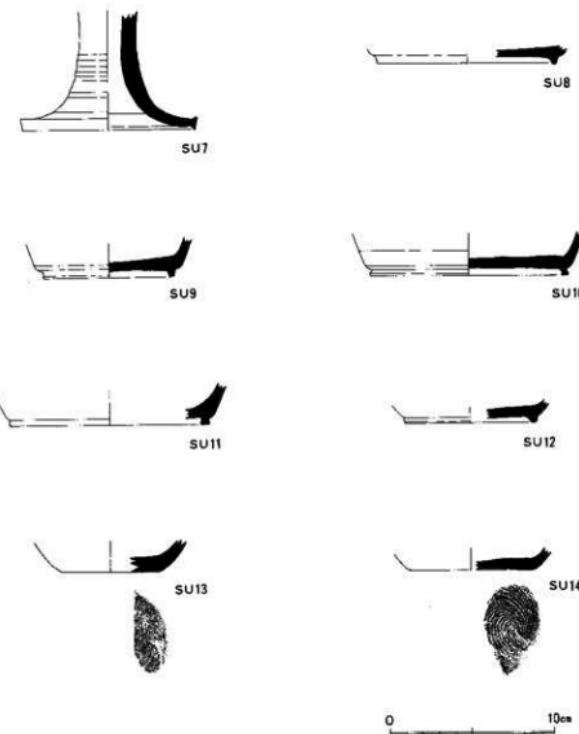
出土量も少なくほとんどが小片であり、全形の分かることは包含層からは出土しなかったが、高坏脚部1点、坏7点を図示した。

#### 高坏（SU7）

坏部分を欠損しているが高脚の高坏と思われる。脚部は大きく外反しており、端部はわずかに内傾する。脚部に自然釉が認められる。

#### 坏（SU8～14）

坏には高台付坏と高台の無いものとがある。高台付坏には、高台が底部のやや内側に直立して付くもの（SU8, 9, 10）と、底部外縁に付くもの（SU11, 12）があり、無高台の坏は回転糸きり底（SU13, 14）である。



第43図 包含層出土須恵器実測図（1：3）

### 石器（第44～47図、図版第39 a～c）

石器は主に黒色土の包含層から出土したが、剥片や用途不明の石器がほとんどで時期についても不明である。

#### 磨石・敲石 (ST 3～7)

自然の礫を利用したもので、両面に磨面のみを有するもの (ST 3, 4), 片面に磨面を有するもの (ST 5), 片面に粗い磨面を有し縁辺に敲打痕の認められるもの (ST 6, 7) ある。

#### 使用痕の認められる礫 (ST 8, 9, 10)

用途は不明であるが磨面や凹痕が認められるもの。

#### スクリイバー (ST11)

安山岩製で長さ5.5cm, 幅4.3cm, 厚さ8mmで素材の片面を加工して直線的な刃部がつくられている。刃部の長さは3.5cmである。

#### 石鎌 (ST12)

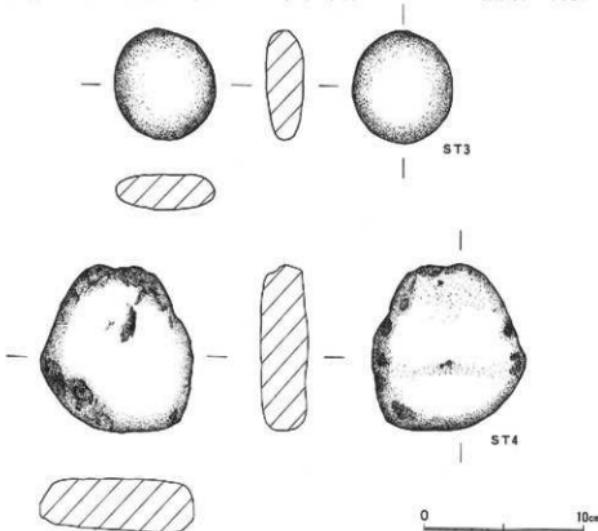
四基無茎式の石鎌で材質は安山岩である。素材のほぼ全面を丁寧に加工している。類例は堀田上遺跡等で認められている。

#### 加工痕のある剥片 (ST13～15)

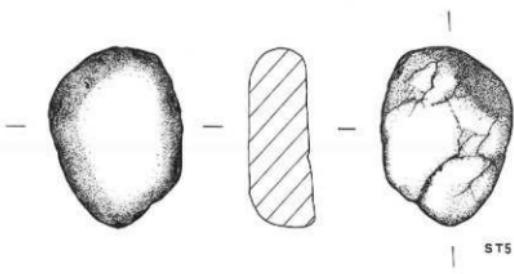
用途は不明であるが加工痕が認められる。ST13は流紋岩製、ST14, 15は安山岩製である。ST13は石鎌の未製品かもしれない。

#### その他の剥片

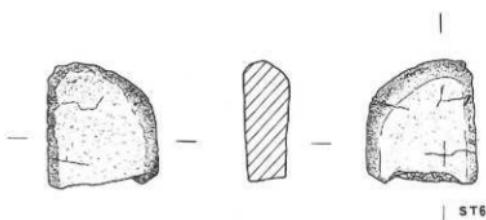
安山岩や黒曜石の剥片が包含層より出土したが小片で図示できないので一括図版に掲載した。



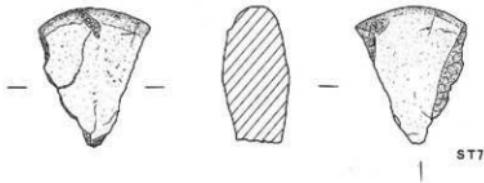
第44図 包含層出土石器実測図① (1 : 3)



ST5



ST6

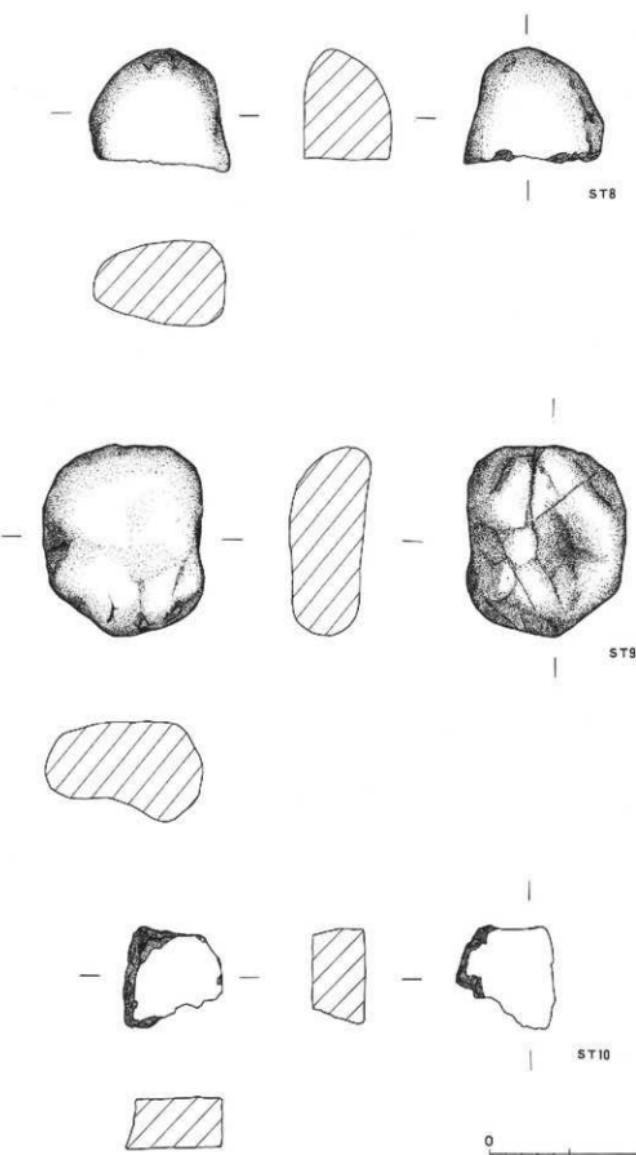


ST7

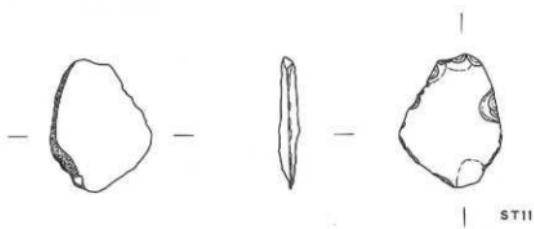


0 10cm

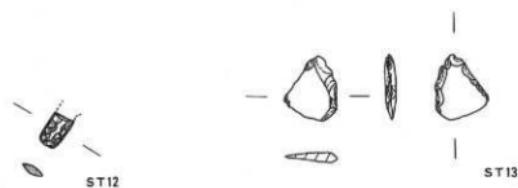
第45図 包含層出土石器実測図② (1 : 3)



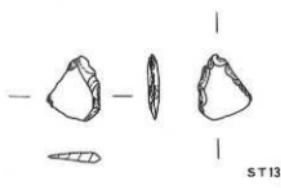
第46図 包含層出土石器実測図③ (1 : 3)



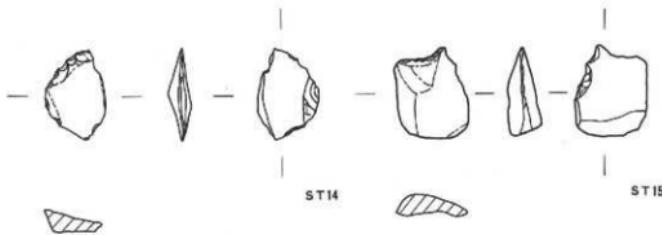
ST11



ST12



ST13



ST14

ST15



第47図 包含層出土石器実測図④ (1 : 2)

第2表 弥生土器観察表

標本番号	図版番号	写真番号	出土位置	土層	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	底厚				
Y1		SI-1	床直壺	15.6	残3.2	0.5	密	1mm程度の砂粒含む	良好	淡赤褐色	口縁に4条の沈線、頸部に波状文ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y2		SI-4	床直壺	13.5	残3.9	0.4	密	少量の砂粒含む	良好	淡橙色	口縁に2条の凹曲文、頸部に斜行刻夷文ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y3		SI-4	床直壺	20.0	残3.0	0.6	密	少量の砂粒含む	良好	淡橙色	口縁に3条の波状削痕に斜夷文ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y4		SI-4	床直壺	18.6	残5.0	0.5	やや粗	1mm程度の砂粒含む	良好	淡橙色	1面に後の凹曲文、頸部に斜行刻夷文ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y5		SI-4	床直壺		残11.2	1.0	密	微砂粒を含む	やや あまい	赤褐色	内外面ともナメ調整	
Y6		SI-4	床直鉢	14.9	8.7	0.4	粗	0.5~1mm程度の砂粒含む	やや あまい	明褐色	外面は墨化により調整不明 内面ヘラケズリ	
Y7		SD-1	溝底壺	24.0	残6.3	0.4	密	1mm程度の砂粒含む	やや あまい	淡橙色	口縁に3条の波状削痕に波状文ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y8		SD-1	溝底壺	14.0	残2.8	0.3	密	少量の砂粒を含む	良好	赤褐色	ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y9		SD-1	溝底壺	18.0	残6.0	0.3	密	1mm程度の砂粒少含む	良好	灰褐色	口縁に波状、内面口下端下垂形ヘラミガキ開脚ヘラケズリ	
Y10		SD-1	溝底壺	15.9	残4.0	0.3	密	微砂粒少量含む	良好	明黄褐色	ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y11		SK-6	壺	15.4	残1.1	0.4	密		良好	橙色	口縁に3条の凹曲文、頸部に斜行刻夷文 内面ヘラミガキ、ヘラケズリ	
Y12		C4	明黒色土壺	23.9	残3.5	0.6	密		良好	外側薄付着 内面淡褐色	口縁に刻日、頸部に7条の沈線 内面ヘラミガキ	
Y13		C5	黒色土壺?		残2.8	0.8	やや粗	1mm程度の砂粒含む	良好	明褐色	口縁が格子文、頸部に波状 内面調整不明	
Y14		B5	明黒色土壺	19.1	残2.0	0.8	密		良好	淡橙色	内外面ともヘラミガキ	
Y15		B2	黒色土壺	20.9	残2.0	0.8	密	1mm程度の砂粒含む	良好	茶褐色	口縁端部は下へのみ拡張、平坦部に斜格子文	
Y16		C5	黒色土壺	16.0	残1.5	0.6	やや粗		良好	淡黄褐色	口縁端部は下へのみ拡張、平坦部に斜格子文	
Y17		C4	明黒色土壺		残3.0	0.9	密	1mm程度の砂粒含む	良好	灰褐色	断面三角形容量文、刻目文 ヨコナデ、ヘラミガキ	
Y18		C5	明黒色土壺		残3.4	0.8	密	1mm程度の砂粒含む	良好	淡橙色	断面三角形容量文、刻目文 ヨコナデ、ヘラミガキ	
Y19		試掘耕作土壺?			残5.2	1.0	密		良好	灰黒褐色	橢円状工具による沈線、 波状文	
Y20		試掘	黒色土壺?		残4.0	0.8	やや粗	1mm~1.5mm程度の砂粒含む	やや あまい	外側青灰色 内面明黄色	橢圓状工具による斜行刻夷文、 同施文原体による沈線	
Y21		B5	明黒色土壺	19.2	残4.3	0.8	密	少量の微砂粒含む	良好	淡橙色	頸部クシ齒状工具で沈線 ヨコナデ、ヘラミガキ	
Y22		C4	黒色土壺	22.6	残3.4	0.5	密	微砂粒を含む	良好	淡橙色	外側ヨコナデ、ハケメ 内面ヘラミガキ	
Y23		C5	黒色土壺	15.0	残4.5	0.5	密		やや あまい	灰色 一部剥離	外側ヨコナデ、ハケメ 内面ヘラミガキ	

種類 番号	図版 番号	出土 位置	土層	器種	寸法(cm)			胎	土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
					口径	器高	器厚					
Y24		C5	黒色上	甕	23.0	残4.5	0.6	密		良好	淡橙色 一部縫付着	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラミガキ
Y25		C5	黒色上	甕	15.6	残3.2	0.5	密		良好	外面灰褐色 内面墨色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ
Y26		C5	黒色土	甕	21.0	残7.5	0.4	密		良好	橙色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラミガキ
Y27		C5	明黒色土	甕		残3.8	0.7	密 微砂粒 含む		良好	茶褐色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラミガキ
Y28		C5	黒色土	甕		残3.7	0.6	密 微砂粒 含む		良好	淡橙色	外面ヨコナデ,ヘラミガキ 内面ヘラミガキ
Y29		B5	黒色土	甕	20.0	残2.7	0.5	密		良好	茶褐色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面風化により調整不明
Y30		C5	黒色土	甕	19.2	残4.7	0.5	密 1mm程度 の砂粒を含む	やや あまい		灰褐色	内外面とも風化により 調整不明
Y31		SI-4	覆 土 壺		17.0	残3.4		密 微砂粒 少量含む		良好	淡橙色 一部縫付着	口縁に4枚文へ状工具で斜行 削り文、ヨコナデ,ハケズリ
Y32		A5		壺	19.0	残4.0		密		良好	淡橙色	口縁に3條の四瓣文へ状工具で斜行 削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y33		B5	明黒色土	壺	14.4	残4.2		密 微砂粒 含む		良好	淡橙色 一部縫付着	口縁に4枚文へ状工具で斜行 削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y34		C5	明黒色土	壺	18.5	残6.0		密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	口縁に3条の四瓣文、外唇ヨコナデ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ
Y35		C5	明黒色土	壺	18.6	残5.9	0.6	密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	口縁に3条の四瓣文、外面ヨコナデ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ
Y36		試掘		壺	23.0	残5.2		密 砂粒少 量含む		良好	淡橙色	口縁無文、外面ヨコナデ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ
Y37		B5	明黒色土	壺	13.7	残6.6	1.4	密 1mm程度の 砂粒を含む	良		淡橙色	山腹に横位に3條の丸線、ナテ調整 内面ヨコナデ,ヘラミガキ
Y38		試掘	耕 作 土	壺?				密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	橢圓状工具による沈線,波状文 内面はヘラケズリ
Y39		C5		壺?				密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	橢圓状工具による沈線,波状文 内面はヘラケズリ
Y40		試掘	明黒色土	壺?				密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	橢圓状工具による沈線,波状文 内面はヘラケズリ
Y41		C6	明黒色土	甕	15.2	残4.0	0.5	密 少量の微 砂粒を含む		良好	茶褐色 一部縫付着	口縁に3条の四瓣文,壠部へ状工具で斜 行削り文、ヨコナデ,ハラケズリ
Y42		SI-4	覆 土 壺		18.8	残4.1	0.4	密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡橙色	山腹に3条の四瓣文,壠部へ状工具で斜 行削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y43		C5	明黒色上	甕	17.3	残3.4		密 1mm程度の 砂粒を含む		良好	淡黄色	口縁に3条の四瓣文,壠部へ状工具で斜 行削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y44		C4	明黒色土	甕	20.0	残4.1	0.6	密 少量の微 砂粒を含む		良好	灰褐色	口縁に3条の四瓣文,壠部へ状工具で斜 行削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y45		C5	明黒色土	甕	18.0	残11.8	0.5	密		良好	淡橙色	口縁に3条の四瓣文,壠部へ状工具で斜 行削り文、ヨコナデ,ヘラケズリ
Y46		B5	明黒色土	甕	14.9	残3.0	0.5	密 微砂粒 を含む		良好	淡黄色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ

検査番号	図版番号	耳取位置	出土位置	上層	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	器厚				
Y47		C5	明黒色土	甕	14.2	残4.5	0.8	密 微砂粒を含む	良好	黄褐色	I層に3条の印文彫刻ヘラ状工具で鋸削状文、ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y48		C5		甕	20.0	残3.5		やや粗 1mm程度の砂粒を含む	あまり	淡橙色	I層に3条の印文彫刻ヘラ状工具で鋸削状文、ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y49		試掘	黒色土	甕	19.6	残3.3	0.5	密 少量の微砂粒を含む	良好	淡黄色	口縁に3条の凹線文 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y50		A6	耕作土	甕	14.1	残3.4		密	良好	淡黄色	I層に3条の凹線文 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y51		C5		甕	16.3	残5.0	0.4	密 少量の微砂粒を含む	やや あまり	淡橙色	I層部に3条の凹線文彫刻状工具で鋸削状文、ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y52		A6	耕作土	甕	13.8	残3.5		密 1~2mm程度の砂粒を含む	良	淡橙色	I層部に4条の沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y53		C5	明黒色土	甕	18.0	残4.5	0.7	密 少量の微砂粒を含む	良好	灰褐色 -墨跡付着	口縁側面に3条の凹線文彫刻ヘラ状工具で鋸削状文、ナデ、ヘラケズリ	
Y54		A5		甕	12.4	残3.2		密 砂粒を含む	良好	橙色 -墨跡付着	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y55		C5	明黒色土	甕	12.3	残5.3	0.3	密	良好	黄褐色 -墨跡付着	口縁側面に3条の凹線文彫刻状工具で鋸削状文、ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y56		SI-4	覆土	甕	17.4	残3.4		密 砂粒少量含む	良好	淡橙色	口縁側面状工具で沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y57		B5	明黒色土	甕	12.6	残3.0	0.3	密 1mm程度の砂粒を多量に含む	良好	淡橙色	口縁側面ヨコナデ彫刻ヘラ状工具で鋸削状文、内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y58		SI-4	覆土	甕	13.1	残4.4	0.4	密 微砂粒を含む	良好	赤褐色	I層側面状工具で3条沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y59		B5	明黒色土	甕	22.9	残3.8		密 1mm程度の砂粒を含む	良好	橙色	口縁側面状工具で3条沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y60		C5	黒色土	甕	21.6	残4.0	0.6	密 1mm程度の砂粒を含む	良好	赤褐色	口縁側面状工具で3条沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y61		C5	黒色土	甕	21.0	残3.8	0.5	密 微砂粒を含む	良好	暗灰色	機械加工で23状の丸線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y62		B5	明黒色土	甕	18.0	残3.6		密 1mm程度の砂粒少量含む	良好	赤褐色	口縁側面状工具で23条沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y63		C4		甕	18.0	残4.8	0.5	やや粗 1mm程度の砂粒多く含む	やや あまり	淡橙色	口縁側面ヨコナデ彫刻ヘラ状工具で鋸削状文、内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y64		試掘		甕	17.0	残5.2	0.3	密 少量の微砂粒を含む	良好	灰茶褐色 -墨跡付着	I層側面彫刻するようだ感により 不規則ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y65		C5	明黒色土	甕	16.3	残5.2	0.6	密 少量の微砂粒を含む	良好	赤褐色	無文で内外面ともヨコナデ	
Y66		B7	黒色土	甕	16.1	残7.0	0.4	密 少量の微砂粒を含む	良好	淡橙色	I層側面1条の沈線、底部へ斜12条の沈線 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
Y67		SI-4	覆土	甕	14.9	残5.8	0.5	密 少量の微砂粒を含む	良好	淡橙色	外面は風化により不明 内外面ともヨコナデ	
Y68		SI-4	覆土	甕	18.1	残5.6		密 1mm程度の砂粒少量含む	良好	赤褐色 -墨跡付着	内外面ともヨコナデ	
Y69		SI-4	覆土	甕	17.9	残5.3		密 1mm程度の砂粒少量含む	良好	橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	

拂図 番号	図版 番号	写真 版	出土 位置	土層	器種	寸法(cm)			胎 土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	器厚				
Y70		SI-4	覆士甕	18.0	残3.6	0.5	密微砂粒 少量含む		良好	橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
Y71		A6	明黒色土底部				密1mm程度 の砂粒少量含む		良好	暗橙色	外面ナデ 内面ヘラケズリ	
Y72		C4	明黒色土底部				密2mm程度 の砂粒含む		良好	灰黒褐色	外面ナデ 内面不明	
Y73		C5	黑色土底部				密1mm程度 の砂粒含む		良好	灰黒褐色	外面ナデ 内面ヘラケズリ	
Y74		C5	黑色土底部				密1mm程度 の砂粒含む		良好	灰褐色	外面ヘラミガキ 内面不明	
Y75		C4	明黒色土底部				密1mm程度 の砂粒含む		良好	灰褐色	外面ナデ 内面不明	
Y76		B4	黑色土底部				密1mm程度 の砂粒含む		良好	淡黄褐色	外面ナデ 内面ヘラミガキ	
Y77		B5	黑色土底部				密2mm程度 の砂粒含む		良好	淡橙色	外面ナデ 内面ヘラケズリ	
Y78		B6	明黒色土底部				密2mm程度 の砂粒含む		良好	淡橙色	外面ナデ 内面ヘラケズリ	

第3表 土師器観察表

拂図 番号	図版 番号	写真 版	出土 位置	土層	器種	寸法(cm)			胎 土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	器厚				
H1		SI-5	床直	高坏	14.1	9.7	0.5	密微砂粒 多量に含む	やや あまい	淡橙色	床部下端に横脚部分ヘラケズリ 口縁は粗い端部は尖りぎみ	
H2		SI-6 竈	床直	甕	29.1	残12.1	0.8	密	良好	橙色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
H3		SI-6 竈	床直	甕	28.0	残12.2	0.8	密	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
H4		SI-6 竈	床直	甕	24.2	残9.4	0.5	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
H5		SI-6 竈	床直	甕	15.0	残12.5	0.5	粗	あまい	灰褐色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
H6		SI-6 竈	地山上	甕	29.4	残6.9	0.7	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ,ハケメ 内面ヨコナデ,ヘラケズリ	
H7		SK13	地山上	片口	11.6	4.0	0.5	密	やや あまい	淡橙色	内外面とも風化により不明	
H8		C6	地山上	甕	14.1	残4.0	0.5	密	やや あまい	淡橙色	内外面ヨコナデ	
H9		C6	地山上	甕	8.5	残9.0	0.6	密	良好	上部淡橙色 下部淡褐色	外面ヨコナデ,脚部不明 内面ヨコナデ,脚部ヘラケズリ	
H10		C6	地山上	甕	6.1	残7.1	0.5	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ,端部尖りぎみ 内面ヨコナデ,指頭状痕	

標	図版	写真版	出土位置	土層	器種	寸法(cm)			胎	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	器厚				
H11		B5	明黒色土	壺	9.8	残10.7	0.4	密	良好	淡橙色	口縁部に窓の痕、ヨコナデ、ハケメ 一部端付着	
H12		A6	黒色土	甕	13.7	残6.5	0.6	密	良好	淡赤褐色	外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H13		B5	明黒色土	壺	17.2	残4.0	0.5	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H14		B5	明黒色土	壺	16.7	残3.9	0.4	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H15		B5	明黒色土	甕	18.7	残3.5	0.6	密	良好	淡褐色	内外面ヨコナデ	
H16		SI-5	覆土	壺	15.9	残3.4	0.5	密	やや あまい	淡橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H17		B5	明黒色土	甕	20.0	残3.1	0.5	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H18		C4	黒色土	壺	11.0	残5.5	0.5	密	良好	淡赤褐色	外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H19		SD1	覆土	甕	23.0	残2.4	0.6	密	良好	淡橙色	内外面とも回転ナデ	
H20		B5	明黒色土	甕	16.0	残3.3	0.6	密	良好	橙色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H21		B5	明黒色土	碗	11.6	4.9	0.7	密	良好	橙色	内外面ともヘラケズリの 後他方向にナデ	
H22		SI-5	覆土	碗	11.6	残5.6	0.5	密	良好	暗褐色	調整は風化により不明 口縁部は直立	
H23		A6	明黒色土	甕	26.0	25.1	0.9	密	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	
H24		SI-5	覆土	碗形土器	4.4	3.0	0.8	密	あまい	淡橙色	外面カキメ 内面指觸痕	
H25		B5	明黒色土	碗形土器	2.4	4.7	0.7	密 微砂粒 含む	良好	暗赤褐色	内外面ともナデ 口縁は内湾	
H26		B7	明黒色土	碗形土器	3.0	3.0	0.5	密	あまい	淡黄褐色	外面風化により調整不明 内面指觸痕 口縁は内湾	
H27		B7	明黒色土	碗形土器	4.0	3.2	0.8	密	良好	淡黄褐色	外面指ナデ 内面指觸痕	
H28		B1	明黒色土	碗形土器	6.0	残3.7	0.6	密 微砂粒 含む	良好	茶褐色	外面指觸痕 内面ナデ 口縁はわざかに外傾	
H29		C5	明黒色土	壺	6.0	残4.5	0.6	密	良好	淡橙色	外面ヨコナデ、ハケメ 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	

第4表 須恵器観察表

擇図 番号	図版 番号	写真 図版	出土 位置	土層	器種	寸法(cm)			胎 土	焼成	色調	文様及び手法の特徴
						口径	器高	器厚				
SU1		SI-5	床面	瓦泉	8.4	残3.7	0.4	密	良好	青灰色	口縁部はやや内反し底部は平坦、輪郭部に輪面三角形の凸部、輪削工具で波状文	
SU2		SI-6	壁直	坏	13.4	4.4	0.5	密	良好	青灰色	回転ナデ調整、口縁下端は底面へラケズリ、高台接地部は輪面	
SU3		SI-6	壁直	坏	14.7	4.6	0.5	密	良好	青灰色	回転ナデ調整、口縁下端は底面へラケズリ、高台接地部は輪面	
UE4		SI-6	床面	坏	13.1	4.1	0.4	密	良好	青灰色	回転ナデ調整、高台接地部は外端面	
SU5		SI-7	床面	蓋	19.9	3.1	0.7	密	良好	青灰色	回転ナデ	
SU6		SI-7	床面	蓋	14.9	2.7	0.6	密	良好	青灰色 一部自然釉	回転ナデ	
SU7		SI-6	覆土	高坏		残7.2	1.0	密	良好	青灰色	回転ナデ	
SU8		C5	明黒色土	坏		残1.0	0.5	密	良好	青灰色	回転ナデ	
SU9		C6	耕作土	坏		残2.2	0.5	密	良好	淡青灰色	回転ナデ	
SU10		SI-7	覆土	坏		残2.6	0.5	密	良好	淡灰色	回転ナデ	
SU11		試A2	黑色土	坏		残2.4	0.5	密	良好	青灰色	回転ナデ	
SU12		SI-6	覆土	坏		残1.1	0.4	密	良好	淡青灰色	回転ナデ	
SU13		C4	明黒色土	坏		残1.8	0.6	密	やや あまい	淡青灰色	回転ナデ 底部は回転糸切	
SU14		C4	明黒色土	坏		残1.1	0.5	密	やや あまい	淡青灰色	回転ナデ 底部は回転糸切	

## V. まとめ

今回の邑智郡瑞穂町における川ノ免遺跡発掘調査は、誘致企業の工場建設により直接影響を受ける部分（1,045m<sup>2</sup>）について実施した。事業主体者の遺跡に対する認識と関係機関の努力で、建物の敷地以外の遺跡を保存することができたことを大きく評価とともに関係者に敬意を表したい。限られた部分の調査であったが、縄文時代早期の押型文土器や織維文土器の出土、弥生時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡7棟の他、溝状造構や土坑など数多くの造構・遺物を検出することができた。当地方の古代史を考える上で貴重な資料となるであろう。

以下、調査によって得られた成果の概要についてまとめておきたい。

### 1. 織文土器について

近年の発掘調査件数の急増で、島根県内でも押型文土器の出土する早期の遺跡数も増加しており、現在までに六日市町九郎原I遺跡<sup>11</sup>や、大和村郷上遺跡<sup>12</sup>など押型文土器出土遺跡が23か所確認されている。瑞穂町においても、1982（昭和57）年発掘調査が実施された横道遺跡<sup>13</sup>で縄文時代早期中葉の押型文土器、早期後葉の織維土器、前期前半の羽島下層式土器群が出土しているほか、野田西遺跡<sup>14</sup>、牛塚原遺跡<sup>15</sup>や長尾原遺跡<sup>16</sup>でも押型文土器が出土している。また1988（昭和63）年度から1990（平成2）年度の3ヶ年にわたりて島根県教育委員会が調査した堀田上遺跡<sup>17</sup>や今佐屋山遺跡<sup>18</sup>では、島根県では初例となったネガティブ（陰刻）文様の神宮寺式並行期に位置づけられる押型文土器をはじめ、黄鳥系や高山寺系押型文土器も出土している。

今回の川ノ免遺跡発掘調査によって出土した押型文土器や織維土器は45点で、時代的には縄文時代早期に属するものであり、それ以降の縄文土器は皆無であった。出土点数が多い調査区はB1（2点）、B4（6点）、B5（11点）、B7（1点）、C1（6点）、C3（2点）、C4（10点）、C5（5点）、不明（2点）である。B4、B5、C4、C5は浅い埋没谷部分に位置するため、流れ込みであると考えられるが、C1出土土器は、平坦地の地山直上で出土しており、ほぼ元位置であると推定される。しかし、調査によって縄文時代の造構や文化層は検出することができず、層位的に出土土器の先後関係を明らかにすることはできなかった。つぎに先学の研究をよりどころに、文様の特徴等により分類を試みた。

河瀬正利氏は山陰地方の縄文早期の土器を次のように分類され、グループ別に編年的な位置づけを示された。

〈押型文Ⅰ〉 器表面に小型の楕円文、山形文、格子目文のめぐらされているグループで黄鳥系土器に対比されるもの。〈押型文Ⅱ〉 粗大な楕円文や胎土に織維の含まれた高山寺系土器に対比されるもの。また、織維土器については、帝釈峠遺跡群山上土器の文様や調整などからつきのように分類されている。〈織維文Ⅰ〉 器壁が1cm以上におよぶ厚手平底の土器で、含まれる織維の量が多く、条痕調整がみとめられないもの。文様としては、斜格子状の沈線がめぐらされるグループ。〈織維文Ⅱ〉 Iと同様の特徴を持つ厚手平底の土器であるが、条痕調整がみとめられ、文様としては、縄文をめぐらすものや縄文と刺突文、竹管文の沈曲線を併用するもの。〈織維文Ⅲ〉 器壁が薄くなり、底部は丸底化し、条痕調整も顕著となり、胎土に含まれる織維の量が少なく、文様としては縄文のめぐらされるものと条

痕のみのものが中心となる土器の3群に分けられ、押型文Iを早期I、押型文IIを早期II、織維文I、IIを早期III、織維文IIIを前期Iに区分され、早期Iを早期中ごろ、早期IIを早期後半、早期IIIを早期末に、前期Iを前期初頭に位置づけられた。

また、近年中国横断自動車道の工事に先行して、島根県教育委員会によって調査された堀田上遺跡や今佐屋山遺跡から出土した縄文土器は、黄島式上器に先行する押型文上器も含まれており、これらを角田徳幸氏は次のように分類されている。

堀田上遺跡〈I類〉神宮寺並行期の土器。〈II類〉神宮寺並行期の次の段階。〈III類〉黄島式古相〈IV類〉高山寺並行古相。

今佐屋山遺跡〈I類〉神宮寺並行期の土器。〈II類〉黄島式並行期。〈III類〉高山寺並行期の古相。〈IV類〉高山寺並行期の新相。〈V・VI類〉河瀬氏の織維文IIIに含まれ、前期初頭に位置づけられるもの。川ノ免遺跡山上の土器をこれに對比すると、川ノ免Ia類は黄島式土器の中で楕円文の大きさが5mm以下の古相から7~8mmの新相を含むと考えられるので、河瀬氏の早期I、堀田上III類、今佐屋山II類に対応する。Ib類は文様の大きさが10mm前後で高山寺系土器の古相の特徴を有しており、河瀬氏の早期II、堀田上IV類、今佐屋山III類に対応すると考えられる。Ic類の変形山形文土器のように隆帯を有する押型文土器の出土例はあまり知られていないが、鳥取県東伯町大法3号古墳の盛土の中から類似した土器の出土例が報告されている。また、広島県豊松村堂面洞窟遺跡出土の変形山形文土器が高山寺系土器の範疇に入るとされており、川ノ免Ic類は河瀬氏の早期III、今佐屋山III~IV類に対応するものと考えられる。

撚糸文系土器については島根県内での出土例はほとんど知られていない。管見する限りでは川ノ免遺跡のほかに津和野町山崎遺跡だけであるが、隣接する広島県では、広島市牛田早稲田山遺跡や帝釈峠観音堂遺跡、戸河内町上殿遺跡などが知られており、鳥取県では上福万遺跡など数か所で出土例がある。河瀬氏によると、撚糸文上器は器壁が薄く、撚りの細かい撚糸が回転施文された撚糸文I類と、器壁が厚く、粗い撚糸で回転施文された撚糸文II類に分類でき、撚糸文I類は黄島式土器と伴出し、撚糸文II類は高山寺系土器に並行するとそれでおり、川ノ免II類の撚糸文土器は器壁が9~10mm程度と厚く、胎土に纖維を含み、撚りの粗い撚糸が回転施文されており、撚糸文II類の範疇に含まれ、早期II、堀田上IV類、今佐屋山III類に対応すると考えられる。

III類条痕文土器は、器壁が1.2~1.5cmと厚手で、胎土に纖維を含んでおり、押型文土器に後出する織維文土器群に含まれ、河瀬氏の分類された織維文IIの範疇に入ると考えられ、河瀬氏の早期III、今佐屋山IV類に対応するものと思われる。

IV類は無文で胎土に纖維を含み、器壁表面に斜行状の擦痕がみとめられる。同様の土器が横道遺跡でも出土している。これらの土器は帝釈峠遺跡群の層位的な調査研究により、押型文土器と羽島下層式との間を埋める土器群であることが明らかにされており、早期IIIに含まれ、今佐屋山IV類とV・VI類の間に位置するのかも知れない。

以上のことから、川ノ免遺跡では、縄文時代早期中ごろから早期末にかけて人々の営みがあったことが明らかとなった。しかし、限られた範囲の調査であり、造構などが検出されておらず、縄文人の生活の一端をうかがい知ることはできなかった。また、出土遺物が少量であることなどから、当遺跡周辺は集団の生活の場や、長期にわたり定住する場ではなく、狩猟や採取活動のため一時的なキャンプ地とし

て使用されたものと推定される。

第5表 繩文時代早期土器変遷対照表

川ノ免遺跡	今佐屋山遺跡	堀田上遺跡	帝駅跡遺跡群	河瀬編年	近畿地方
		I類	観音堂第19層下層		大川
	I類	II類			神宮寺
I類a		III類	馬渡第3層下層(黄島占相)	早期I	葛籠尾崎
	II類		馬渡第3層下層(黄島占相)		
I類b・II類	III類	IV類	観音堂第19層下層		高山寺
I類c・III類	IV類			早期II	
IV類	V類・VI類		寄倉第11層	早期III	穂谷

本表は、註(7)第9表押型文土器遺跡を参考、同(8)第6表縄文時代早期中葉～後葉土器対照表を参考して作成した。

第6表 島根県内押型文土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	文様の種類	時期				備考
				神宮寺期	貴島期	高山寺期	穂谷期	
1	川ノ免遺跡	邑智郡瑞穂町山田	小型楕円文・大型楕円文・撚糸文・条痕文・無文	○	○	○	○	本報告書
2	堀田上遺跡	邑智郡瑞穂町市木	ネガティブ楕円文・山形文・小型楕円文・格子目文・刺突文・大型楕円文・条痕文・無文	○	○	○	○	註(7)
3	今佐屋山遺跡	邑智郡瑞穂町市木	小型楕円文・格子目文・条痕文・大型楕円文・繩文	○	○	○	○	註(8)
4	牛塚原遺跡	邑智郡瑞穂町上龜谷	大型楕円文			○		註(4)
5	野田西遺跡	邑智郡瑞穂町上龜谷	山形文・大型楕円文・条痕文			○		註(4)
6	順庵原B遺跡	邑智郡瑞穂町下龜谷	平行短線・文様不明			○		註(19)
7	長尾原遺跡	邑智郡瑞穂町下龜谷	山形文・大型楕円文			○		註(6)
8	横遺遺跡	邑智郡瑞穂町高見	小型楕円文・山形文・格子目文・大型楕円文・繩文・条痕文	○	○			註(3)
9	郷上遺跡	邑智郡大和村都賀行	ネガティブ格子目文・小型楕円文・山形文・人形楕円文・繩文	○	○	○	○	註(2)
10	難越遺跡	邑智郡石見町井原	大型楕円文・粗大楕円文			○		註(37)
11	九郎原I遺跡	鹿足郡六日市町藏木	山形文・小型楕円文		○			註(1)
12	山崎遺跡	鹿足郡津和野町中座	山形文・楕円文・撚糸文		○	○		註(12)
13	高田遺跡	鹿足郡津和野町高峯	小型楕円文・無文・条痕文		○			註(20)

番号	遺跡名	所在地	文様の種類	時期		備考
				神宮寺期	黄鳥期	
14	上ノ原遺跡	美濃郡匹見町匹見	山形文・格子目文	○	○	註(21)
15	日脚遺跡	浜田市日脚町	山形文・菱形文	○	○	註(22)
16	保賀遺跡	飯石郡赤来町保賀	小型格円文	○	○	註(23)
17	小万歳遺跡	仁多郡横田町竹崎	小型格円文	○	○	註(24)
18	ヒエケ谷遺跡	仁多郡横田町中村	小型格円文	○	○	"
19	半田遺跡	仁多郡横田町中村	大型格円文	○	○	"
20	下大仙子遺跡	仁多郡横田町中村	大型格円文	○	○	註(25)
21	国竹遺跡	仁多郡横田町稻原	山形文・小型格円文・条痕文 繩文・無文	○	○	註(26)
22	柏原遺跡	仁多郡横田町大馬木	山形文	○	○	註(27)
23	菅沢遺跡	能義郡広瀬町菅原	山形文・格子目文・大型格円文 無文・条痕文	○	○	註(28)

第7表 邑智郡内縄文土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	備考	
								瑞穂町	山田
1	川ノ免遺跡	瑞穂町山田 川ノ免	○					本報告書	
2	今佐尾山遺跡	瑞穂町市木 観音寺原	○					註(7)	
3	堀田上遺跡	瑞穂町市木 観音寺原	○					"	
4	拂路橋遺跡	瑞穂町市木 猪子山	○	○	○	○	○	"	
5	米屋山遺跡	瑞穂町市木 観音寺原	○					"	
6	牛塚原遺跡	瑞穂町上龜谷 朝原	○					註(4)	
7	野田西遺跡	瑞穂町上龜谷 朝原	○					"	
8	道城遺跡	瑞穂町上龜谷 朝原				○		"	
9	大畠遺跡	瑞穂町上龜谷 大草		?				註(29)	
10	順庵原B遺跡	瑞穂町下龜谷 順庵原	○					註(19)	
11	長尾原遺跡	瑞穂町下龜谷 長尾原	○					註(6)	
12	横道遺跡	瑞穂町高原 段ノ原	○					註(3)	
13	大字根遺跡	瑞穂町伏谷 上伏谷			○	○		註(29)	
14	今西遺跡	羽須美村字都井今西				○		註(30)	
15	郷上遺跡	大和村郷行 郷上	○		○	○		註(2)	
16	大浦遺跡	大和村郷行 大浦				○	○	註(31)	
17	都橋遺跡	大和村都賀本郷				○	○	註(32)	
18	滝原遺跡	邑智町滝原				○	○	註(34)	
19	築瀬遺跡	邑智町築瀬				○	○	"	
20	沖丈遺跡	邑智町乙原 沖丈				○	○	註(35)	

番号	遺跡名	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	備考
21	キタバタケ遺跡	川本町川本 木路原			○	○		註(36)
22	獺越遺跡	石見町井原 獺越	○					註(37)
23	築廻遺跡	石見町井原 築廻			○			註(38)
24	割田遺跡	石見町中野 森実				○		"
25	小掛谷遺跡	石見町矢上 小掛谷	○					註(37)
26	湯谷原谷遺跡	石見町日貫		○				"
27	沖田原遺跡	石見町日貫 高瀬原				○	○	註(38)

## 2. 弥生時代

木遺跡で最も多く出土した土器は弥生土器であるが、前期～中期の範囲に入る土器は非常に少量で、後期に入りその量は爆発的に増加する。また、検出した遺構も堅穴住居跡4棟(S I - 1・2・3・4)、溝状遺構(S D - 1)や土坑、ピット等を検出したが、遺構も他の時代に属する遺構に比べて最も多い。これらの状況から、本遺跡は弥生時代の後期を中心とする集落跡であると言える。

以下、完掘した遺構の概要について述べる。

住居跡の平面形は、隅丸方形と円形に分けることができる。

隅丸方形住居跡はS I - 1で、ほぼ同時期の類例は野田西遺跡や鹿足郡六日市町前立山遺跡S I - 17・19等がある。<sup>(39)</sup> ピット内出土土器から後期前半から中葉と思われる。

円形住居跡はS I - 2・4であるが、S I - 2は遺構面直上の遺物は小片で時期の特定はできないが、覆土内出土遺物や近接するSK - 6出土遺物から後期中葉ごろと推定される。S I - 4は検出された柱穴から2本柱であることが判明したが、このような類例は周辺の遺跡では未だ確認されていない。S I - 3は、近年の道路工事により壁面は完全に削り取られていたが、4個の柱穴と中央ピットを検出した。遺構面より時期を推定する遺物は出土しなかったが、周囲から出土する遺物から弥生時代後期の遺構であると考えられる。

今回検出した堅穴住居は、S I - 2以外は円形または梢円形の中央ピットが設けられている。こうした例は瑞穂町内の遺跡で発掘された堅穴住居に共通している。また、島根県内や広島県等近隣においても同様であり、弥生時代後期の堅穴住居の一般的な構造である。これらの中央ピットは堅穴住居の床面のほぼ中央に設けられた穴で、機能については炉や貯蔵穴とされるもの、またごく少数であるが柱痕を残すものもあり、多様な機能が想定されると言われている。<sup>(40)</sup>

木遺構の中央ピットは、S I - 3・4で焼土が認められた。特にS I - 4は深さ約15cmでピット内に粘土をはり、積極的に火を使用した痕跡が認められたが、S I - 3は深さ約17cmで、わずかに焼土が検出されただけであった。S I - 1の中央ピットからは焼土や炭化物は認められなかった。また、遺構面は後世の耕作地でかなり削られており、本末の規模は不明であるが、わずかに遺存している床面から深さは約40cmであると推定され中央ピットの中では最深である。これらのことから、S I - 3・4の中央ピットは炉で、S I - 1のそれは貯蔵穴であると推定される。

S I - 2からは中央ピットは検出されず本遺跡の中では例外と言える。また、遺物は磁石や用途不明

の台状の石のみで土器類は小片がわずかに出土しただけであった。他と同様住居跡と推定されるが、住居以外の施設、例えば工房跡のようなものである可能性も否定できないが、木造構を工房跡に結び付ける積極的な状況証拠は得られなかった。

S D-1 は調査区北側で検出された遺構であるが、湾曲して調査区外へ伸びており全容は不明である。時期は出土した土器から弥生時代後期中葉から後葉にかけてと推定される。平面形は細長い溝状を呈しているが、土層觀察からは水が流れたり、溜っていたという痕跡は認められなかった。推論の域を脱しないが、段丘上と北側に広がる沖積地を結ぶ通路的な用途があったのかもしれない。

瑞穂町では、弥生時代の遺跡は出羽盆地の河岸段丘を中心に現在までに27か所確認されているが、その内、前期や中期の集落跡は順庵原遺跡、牛塚原遺跡、長尾原遺跡等9か所が知られている。

邑智郡内の弥生時代集落は、現在までに48か所確認されている。江の川流域では、大和村の郷上遺跡、邑智町の滝原遺跡<sup>(46)</sup>、沖丈遺跡<sup>(47)</sup>、川本町のキタバタケ遺跡<sup>(48)</sup>などが知られているが、多くは江の川支流の濁川上流にひらけた石見町矢上盆地と出羽川上流の瑞穂町出羽盆地を中心とする邑智郡南部の高原地帯に集中している。また、県境をはさんで隣接する広島県大朝町では横路、洞泉寺、下の谷、岡の段遺跡等弥生時代前期から後期の遺跡が確認されている。特に横路遺跡は中国山地における初期農耕集落の初めての発見例となり、堅穴住居跡や多くの土坑が検出されている。当方の弥生文化の伝播の源は江の川流域からではなく、山陽側の高原部に求められるのかもしれない。

第8表 邑智郡内弥生土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	前期	中期	後期	備考
1	川ノ免遺跡	瑞穂町山田 山田	○	○	○	本報告書
2	今佐屋山遺跡	瑞穂町山木 観音寺原		○		註(7)
3	場田上遺跡	瑞穂町山木 猪子山		○		"
4	定入遺跡	瑞穂町鰐淵 出羽坪			○	註(48)
5	原下遺跡	瑞穂町鰐淵 鰐淵下			○	"
6	清水ヶ尻遺跡	瑞穂町鰐淵 鰐淵下			○	"
7	長尾原遺跡	瑞穂町下龟谷 長尾原		○	○	註(49)
8	順庵原A遺跡	瑞穂町下龟谷 順庵原	○	○	○	註(29)
9	順庵原B遺跡	瑞穂町下龟谷 順庵原		○	○	註(50)
10	馬場山遺跡	瑞穂町上龟谷 馬場山			○	註(51)
11	野田西遺跡	瑞穂町上龟谷 朝原	○	○	○	註(4)
12	野田遺跡	瑞穂町上龟谷 朝原			○	"
13	人金谷遺跡	瑞穂町上龟谷 朝原			○	"
14	道城遺跡	瑞穂町上龟谷 朝原	○			"
15	牛塚原遺跡	瑞穂町上龟谷 朝原	○	○	○	"
16	滑遺跡	瑞穂町山田 山田			○	註(52)
17	若林遺跡	瑞穂町淀原 淀原	○			"
18	重石遺跡	瑞穂町高見 入野			○	註(53)

番号	遺跡名	所 在 地	前期	中期	後期	備 考
19	賀茂山遺跡	瑞穂町高見馬場			○	註(53)
20	段ノ原A遺跡	瑞穂町高見安田			○	"
21	塚原遺跡	瑞穂町和田吉時			○	"
22	石堂遺跡	瑞穂町和田谷川			○	"
23	大番原遺跡	瑞穂町和田上和田			○	"
24	狼原上遺跡	瑞穂町和田上和田			○	"
25	田ノ原坂遺跡	瑞穂町上伏谷田ノ原			○	"
26	宮原遺跡	瑞穂町上伏谷上伏谷			○	"
27	倉谷遺跡	瑞穂町上伏谷上伏谷			○	"
28	普城遺跡	羽須美村戸内袖の木		○	○	註(54)
29	行名遺跡	大和村宮内行名			○	註(31)
30	郷上遺跡	人和村都賀行郷上			○	註(2)
31	長屋沖遺跡	大和村都賀行郷上			○	"
32	都禍遺跡	大和村長藤中分			○	註(33)
33	大浦遺跡	大和村都賀行大浦			○	註(31)
34	西光寺前遺跡	大和村宮内			○	註(33)
35	滝原遺跡	邑智町滝原滝原	○	○	○	註(34)
36	渡廊遺跡	邑智町柏淵小原			○	"
37	野井遺跡	邑智町野井野井	○	○	○	"
38	吾郷宮ノ段遺跡	邑智町吾郷宮ノ段			○	"
39	沖丈遺跡	邑智町乙原沖丈	○	○	○	註(35)
40	石原遺跡	邑智町石原石原			○	"
41	キタバタケ遺跡	川本町川本木路原		○	○	註(36)
42	余勢野原遺跡	石見町中野余勢	○	○	○	註(37)
43	和泉原遺跡	石見町中野幸米中泉	○			"
44	松山遺跡	石見町中野横引			○	"
45	森ノ下遺跡	石見町中野森実			○	"
46	名子山遺跡	石見町中野森実			○	"
47	天藏寺原遺跡	石見町井原天藏寺			○	"
48	湯谷惡谷遺跡	石見町日置			○	"

### 3. 古墳時代

古墳時代の遺構はS I - 5のみで、平面形は隅丸方形の竪穴住居である。床面直上より出土した遺物は高杯と龜片である。龜は、胎上や焼成の状態、器形等から搬入品と思われ、その特徴から大阪灣邑編年I - 5段階、日脚編年1 A段階に相当し5世紀末ごろと推定される。したがって本遺構は5世紀末ごろの住居跡と言える。また、住居跡埋土中や遺構周辺からミニチュア土器が出土しており、祭祀にかかわる遺構かも知れないがC 6調査区の祭祀遺物との関係は不明である。

#### 4. 奈良時代

この時代の遺構は、S I - 6・7の2棟の堅穴住居跡を検出した。S I - 6の平面形はやや長方形を呈した方形で東側の壁のほぼ中央部に板状の石を組合せた吹き口と、半地下式の煙道を備えたつくり付けの竈を設けている。

つくり付けの竈は東日本や山陽側に分布が顕著であり、山陰側は移動可能な置き竈が主流で、つくり付けの竈の報告例は少ないが、近年の発掘調査の増加にともなって中国山地を中心に山陰側でも発掘例が増加している。瑞穂町内では、今佐屋山遺跡（6世紀末）、長尾原遺跡（6世紀末）、野田西・大金谷遺跡（8世紀）等でつくり付けの竈が検出されている。邑智郡内では川本町キタバタケ遺跡（8～9世紀）、大和村郷上遺跡（7世紀）でつくり付けの竈が検出されている。また、近隣では鹿足郡匹見町長グロ遺跡（8世紀）、那賀郡旭町重富遺跡（8世紀）、飯石郡頼原町森遺跡（6世紀末～8世紀前半）、森III遺跡（6世紀末～8世紀末）、板屋III遺跡（6世紀末～7世紀）で同様の竈の検出が報告されている。これらの煙道は、比較的長く壁面中央部にあるものと、短く中央部から離れるものに分かれ、前者は川ノ免遺跡、キタバタケ遺跡、重富遺跡でいずれも石見地区山間部、後者は森遺跡、森III遺跡、板屋III遺跡で出雲地区山間部に位置する。これらの構造の差異は地域性によるものか、または時代によるのか不明である。今後の資料の蓄積に期待したい。

つぎに出土遺物で注目されるものに、S I - 6の北側壁面より重なって出土した須恵器壺がある。これらはその調整方法や高台の特徴から、瑞穂町内に分布する永久古窯跡群で作られたものではなく他地域から搬入されたものと推定され、重富遺跡S I 0 9や同第III区北斜面出土遺物に類例が認められる。

遺構の時期はこれら出土遺物から大阪陶邑編年IV-2～3段階、口脚編年VII段階に相当し8世紀前半ごろと推定される。

S I - 7は後世の擾乱で西側を失っているが、平面形は平行四辺形状の変形プランを呈している。郡内には今のところ類例は無いが、板屋III遺跡で同様の堅穴住居跡（7世紀初頭）が2棟検出されている。時期的には板屋IIIより新しく、出土遺物から大阪陶邑IV-3～4段階に相当し8世紀中から後半ごろと推定される。

#### おわりに

今回の調査は、誘致工場建設に先だって実施した限られた範囲内の調査であり、古代の集落跡の全容を明らかにできなかった。しかし、縄文時代早期ごろよりこの地で人々の営みがあったことが明らかとなり、また、弥生・古墳・奈良それぞれの時代の堅穴住居の資料を得ることができ、当地方における住居の変遷解明の糸口を見つけることができた。瑞穂町でつくり付けの竈を備えた堅穴住居跡の調査例は、長尾原遺跡や今佐屋山遺跡の古墳時代末ごろのものであり、奈良時代の堅穴住居跡の検出は今回の調査が初例である。堅穴住居から掘立柱建物に変わっていくのは古墳時代の終末ごろと言うのが一般的であるが、本遺跡や野田西、重富、森遺跡や広島県人朝町杉ヶ迫遺跡、三次市大歳遺跡、三良坂町道ヶ曾根遺跡などの調査例から、当地方のような山間部は奈良時代ごろの住居の形態としては掘立柱建物より堅穴住居が一般的なものであったのだろうと推測できる。このことが、日本海沿岸部と比較して文化的後進性によるものか否かは不明であるが、つくり付けの竈の分布が山陽地方に集中していることから、西中国山地一帯は、日本海側より山陽側とつながりが強いといえそうである。今後の類例の蓄積により再検討したい。

## 註

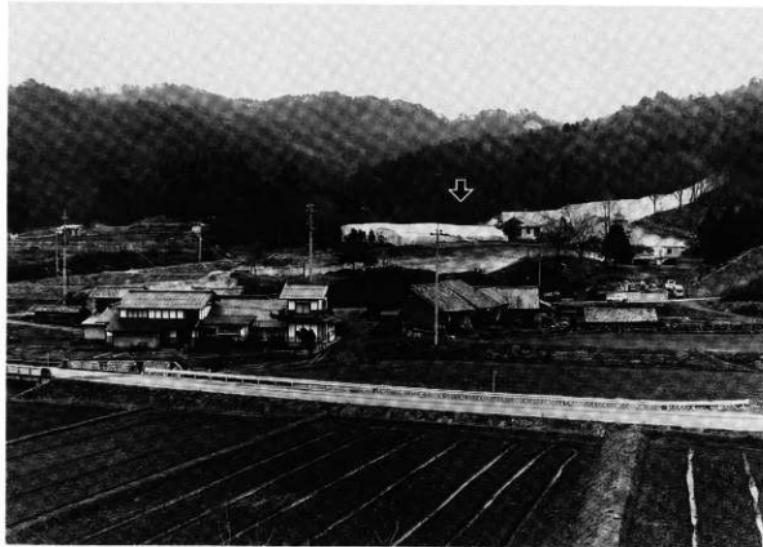
- (1). 島根県教育委員会「九郎原I遺跡」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1980年3月。
- (2). 大和村教育委員会「江の川宅地等水防災対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 郡上遺跡」1995年3月。
- (3). 河瀬正利「機道遺跡-詳細遺跡分布調査報告書」瑞穂町教育委員会 1982年。
- (4). 瑞穂町教育委員会「いにしえの瑞穂-水明カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査概要-」1995年3月。
- (5). 前掲註(4)。
- (6). 瑞穂町教育委員会「長尾原遺跡発掘調査報告書I」1994年3月。
- (7). 島根県教育委員会「主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査」1991年3月。
- (8). 島根県教育委員会「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」1992年3月。
- (9). 河瀬正利「山陰地方の編文早期前期土器の様相」山陰考古学の諸問題 山本清先生喜寿記念論集刊行会 1966年10月。
- (10). 東伯町教育委員会「人法3号墳(三塚ノ谷古墳)発掘調査報告書」1979年。
- (11). 河瀬正利「広島県山縣郡戸河内町上殿遺跡の編文早期遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第46巻 広島大学文学部 1987年。
- (12). 津和野町広報委員会「広報つわの」No.216 1990年9月。
- (13). 見見浩「島根牛田早羅田山遺跡の発掘調査報告」『広島考古学研究』第2号 1960年。
- (14). 川越哲志「鷹音室洞窟遺跡の調査-第五次~第十二次調査-」帝奈候遺跡群 1976年。
- (15). 前掲註(9)。
- (16). 鳥取県教育文化財団「上福万遺跡」「中國横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年。
- (17). 前掲註(9)。
- (18). 前掲註(9)。
- (19). 瑞穂町教育委員会が1995年に実施した調査で口縁部が出土している。
- (20). 津和野町「高田地区埋蔵文化財分布調査概要報告書」1991年。
- (21). 中村友博「島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査」匹見町教育委員会 1995年3月。
- (22). 島根県教育委員会「口脚遺跡-日脚住山団地予定地内発掘調査報告書」1985年3月。
- (23). 島根県教育委員会松本岩雄氏のご教示による。
- (24). 杉原清一「横田町の鷹文早期割型文土器」『島根考古学会誌』第1集 島根考古学会 1984年。
- (25). 横田町教育委員会「ドア仙子遺跡」1985年3月。
- (26). 三浦清・吉郷和宏「「ガラの庄座から島根県横田町国竹遺跡」『山陰地域研究 伝統文化』第4集 島根大学山陰地域研究総合センター 1988年。
- (27). 横田町教育委員会「柏原遺跡」「角ノ宮ノ出神横穴 柏原遺跡」1994年3月。
- (28). 富川町間連遺跡調査整備委員会「菅原遺跡発掘調査報告書」1981年。
- (29). 吉川正「古代史」『瑞穂町誌』第3集 瑞穂町教育委員会 1976年。
- (30). 橋山純夫「羽須美村の古代史」「羽須美村史」上巻 羽須美村 1987年。
- (31). 門脇俊彦「村のあけば」「大和村誌」上巻 大和村 1981年。
- (32). 三上利三・振井久之「八雲立つ風土記の丘」NO.116 1992年12月。
- (33). 大和村教育委員会振井久之氏のご教示による。
- (34). 門脇俊彦「古代」『邑智町誌』上巻 邑智町 1978年。
- (35). 邑智町教育委員会牧田公平氏のご教示による。
- (36). 川本町教育委員会「キタノ川遺跡発掘調査報告書」川本町教育委員会 1992年3月。
- (37). 中田健一氏のご教示による。
- (38). 門脇俊彦・市川正「遺跡と遺物」『島根県邑智郡石見町誌』上巻 石見町 1972年。
- (39). 島根県教育委員会「前立山遺跡」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1980年3月。
- (40). 瑞穂町教育委員会が実施した野田西遺跡第1調査区で同様の住居跡が出土している。
- (41). 宮本長二郎「ベッド状遺構と單耳施設」『季刊考古学』第32号 雄山閣。
- (42). 前掲註2。
- (43). 前掲註34。
- (44). 前掲註35。
- (45). 前掲註36。
- (46). 横路遺跡調査「横路遺跡-農業基盤整備事業に伴う広島県大朝町新庄所在遺跡の発掘調査-」1982年。
- (47). 大朝町「大朝町史」上巻 1978年 なお、岡の段遺跡の詳解については「中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(II)(IV)1993+1994年財広島県埋蔵文化財調査センターにより報告されている。
- (48). 瑞穂町教育委員会「瑞穂町内遺跡分布図I」1985年。
- (49). 瑞穂町教育委員会「長尾原遺跡発掘調査概要書」1995年。
- (50). 瑞穂町教育委員会「前庵山遺跡発掘調査概要書」1995年。
- (51). 瑞穂町教育委員会「馬場山遺跡発掘調査概要書」1991年。
- (52). 瑞穂町教育委員会「瑞穂町内遺跡分布図II」1985年。
- (53). 瑞穂町教育委員会「瑞穂町内遺跡分布図III」1990年。
- (54). 羽須美村教育委員会角谷永嗣氏のご教示による。
- (55). 中村浩編「須恵器集成岡縁近畿編I」雄山閣。
- (56). 前掲註22。

63. 前掲註8。
64. 門脇俊彦『長尾原遺跡及長尾原一号墳調査概報』島根県川本農林土木事務所 1969年2月。
65. 前掲註4。
66. 前掲註36。
67. 前掲註2。
68. 北見町教育委員会「長クロ遺跡」「水印ノ上人遺跡・長クロ遺跡・下正ノ田遺跡」 1991年3月。
69. 島根県教育委員会「重富遺跡」「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」 1992年3月。
70. 島根県教育委員会「森遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2」 1994年3月。
71. 越原町教育委員会山崎頼了氏のご教示による。
72. 島根県教育委員会舟田徹泰氏のご教示による。
73. 島根県埋蔵文化財調査センター「杉ヶ迫遺跡」「中国横断自動車自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(Ⅲ) 1993年。
74. 勝広島県埋蔵文化財調査センター「大歳遺跡」 1991年。
75. 勝広島県埋蔵文化財調査センター「道ヶ曾根遺跡」「牛報4」 1993年。

# 図 版



図版第1



a. 川ノ免遺跡遠景（北西から）

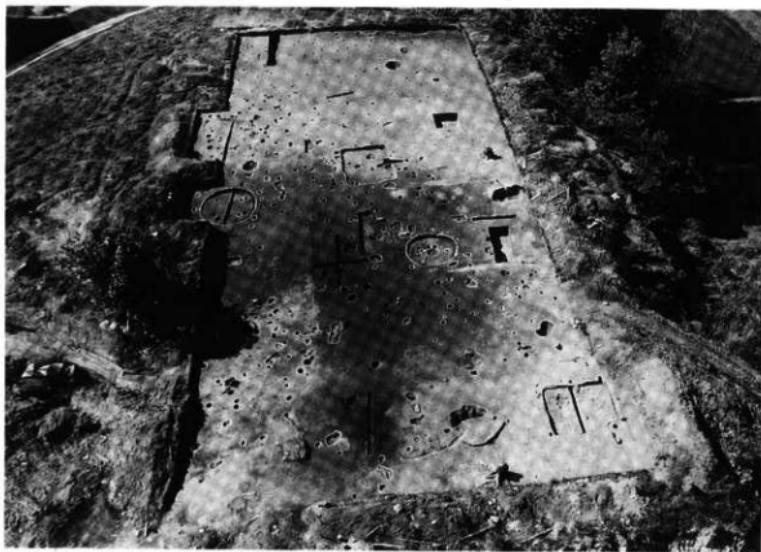


b. 同近景（南東から）

図版第2



a. 調査地内ビニールハウス設置風景（南東から）

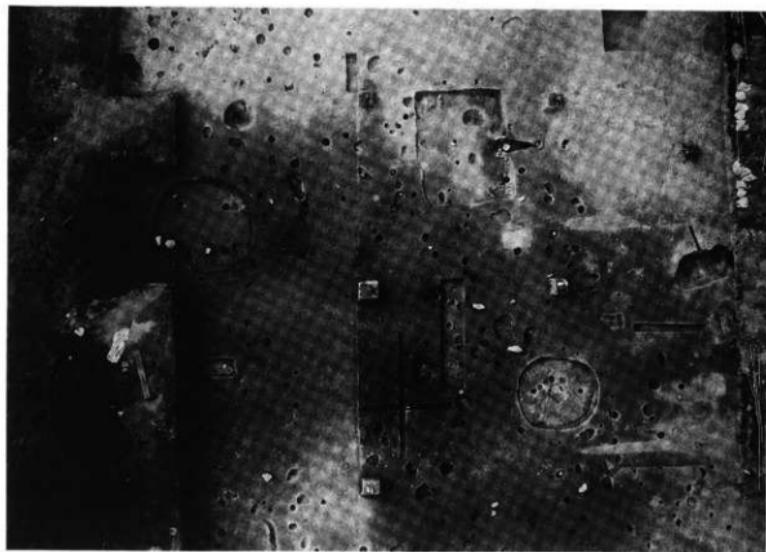


b. 川ノ免遺跡空中写真（南東上空から）

図版第3



a. 調査地北側空中写真（南東上空から）

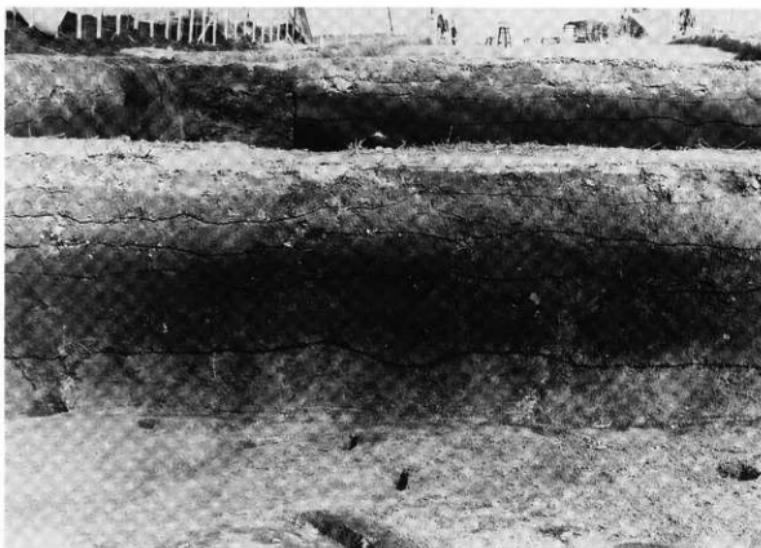


b. 同中央部空中写真（真上から）

図版第4

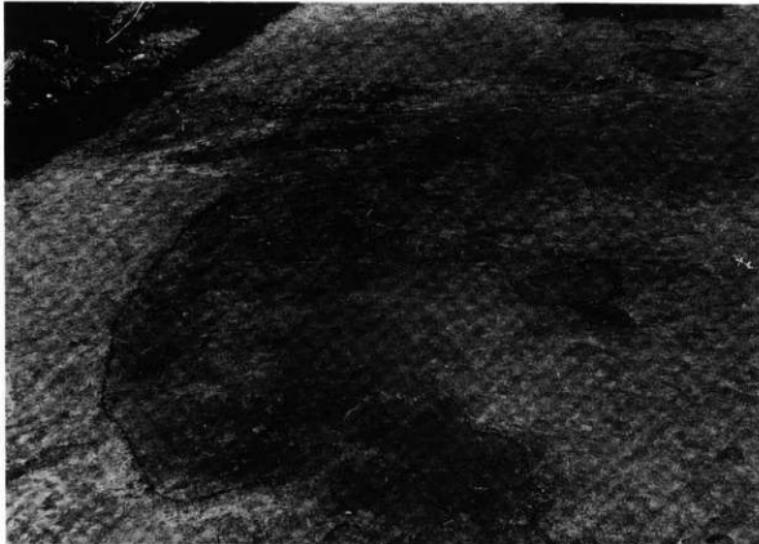


a. 調査地南側空中写真（南東上空から）

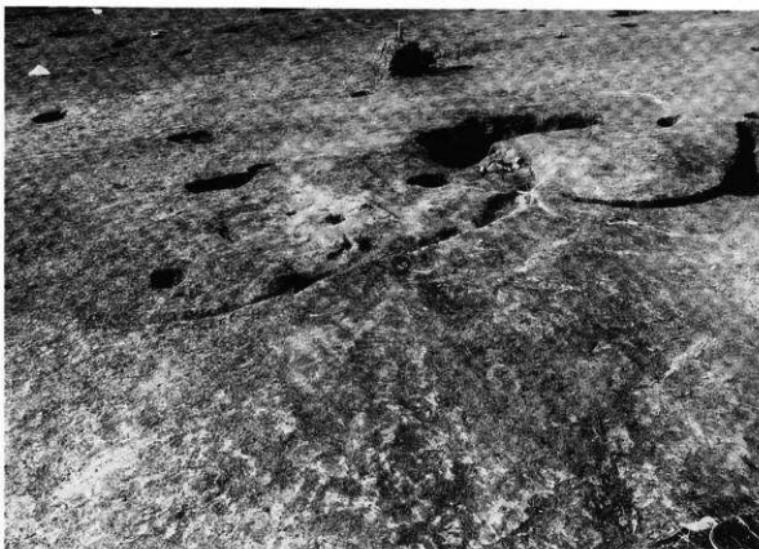


b. 調査地基本層序（南東から）

図版第5

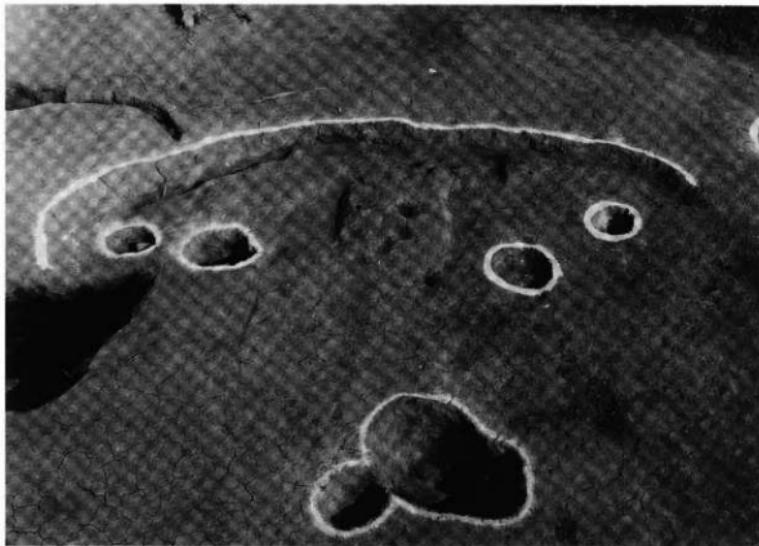


a. S I - 1 検出状況（東から）

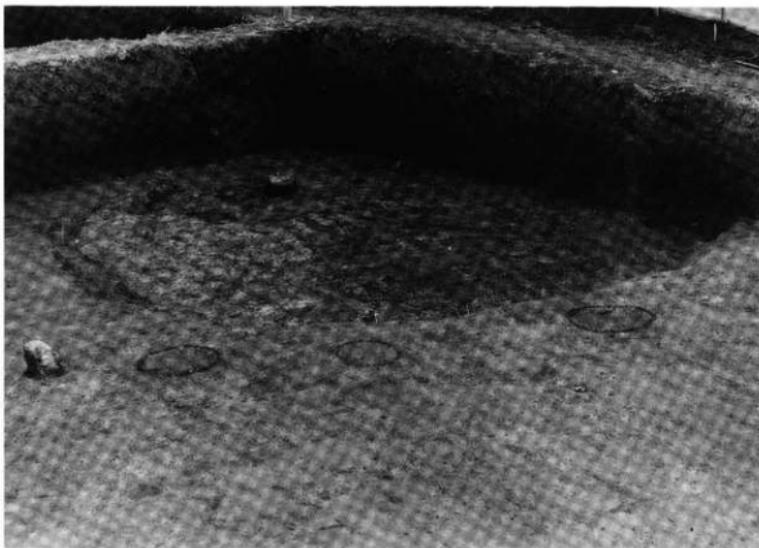


b. 同完掘状況（南から）

図版第6

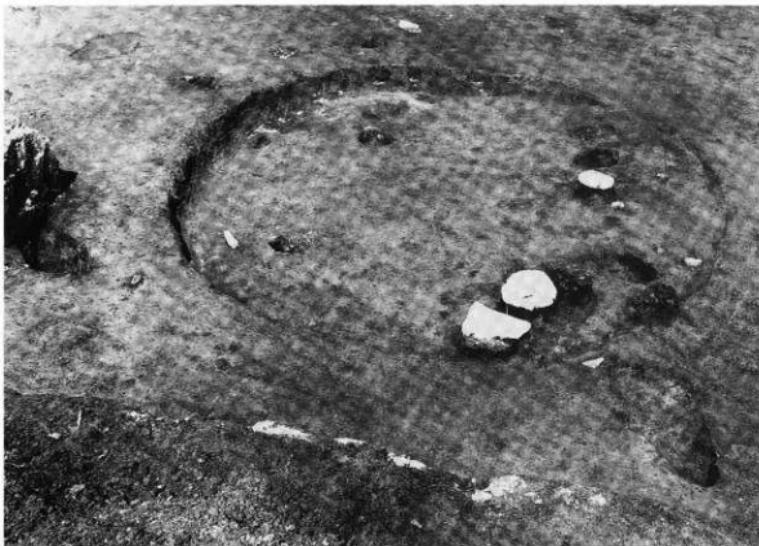


a. SI-1 完掘状況 (北から)

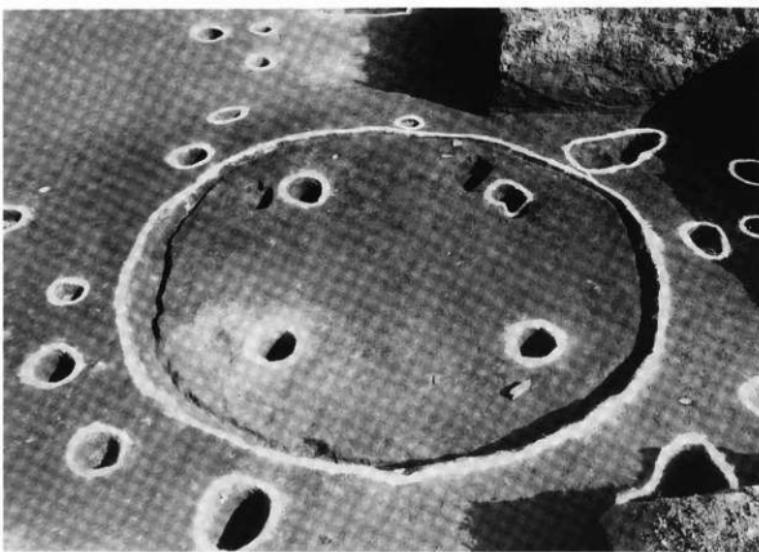


b. SI-2 検出状況 (北東から)

図版第 7

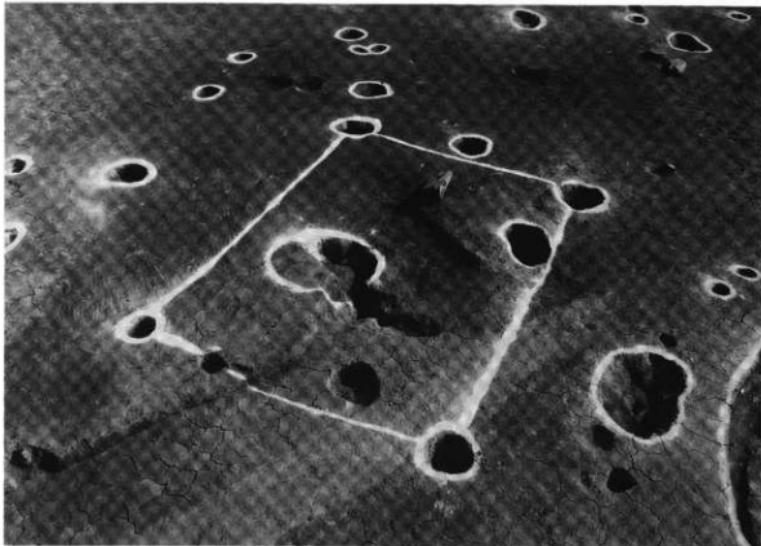


a. S. I - 2 遺物出土状況（北西から）

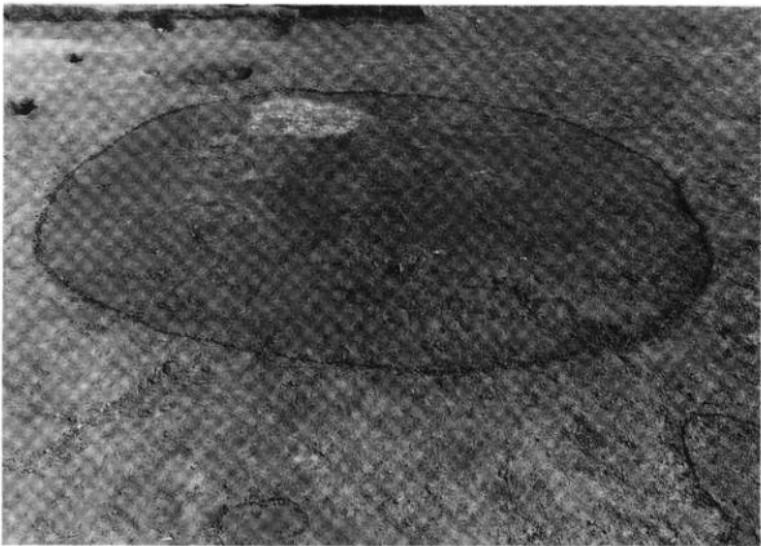


b. 同完掘状況（同）

図版第8

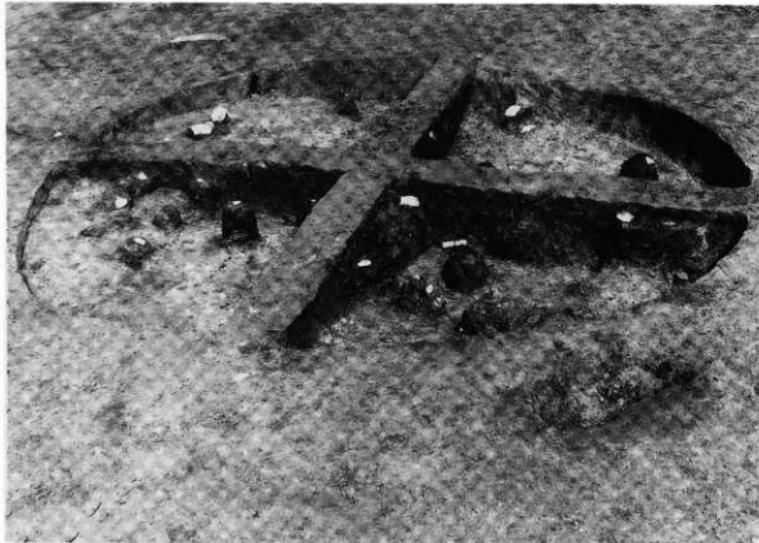


a. S I - 3 完掘状況（北から）

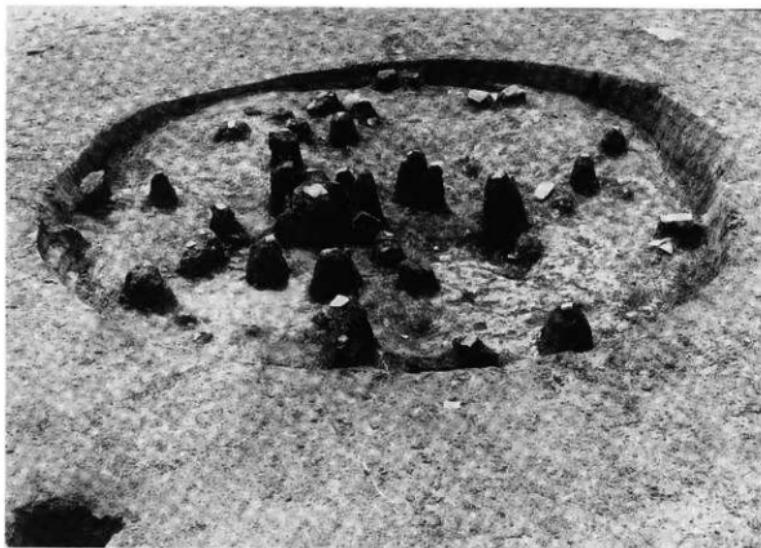


b. S I - 4 検出状況（南東から）

図版第9

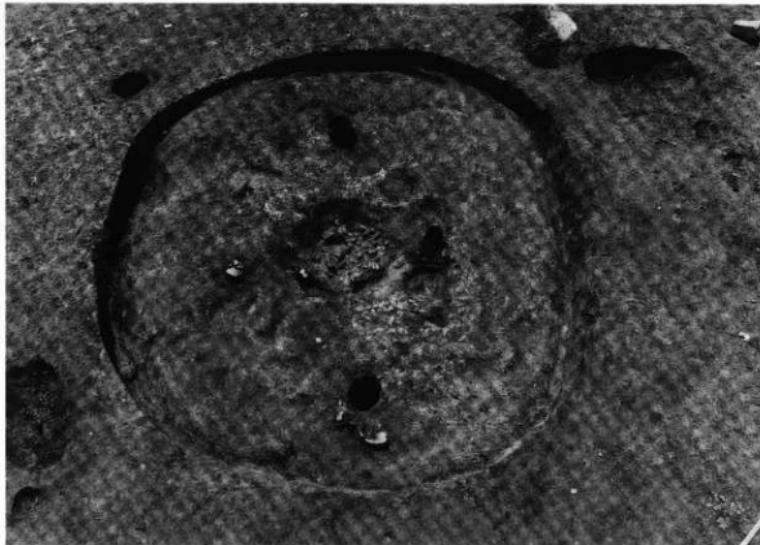


a. S I - 4 土層断面（南東から）



b. S I - 4 遺物出土状況（北東から）

図版第10

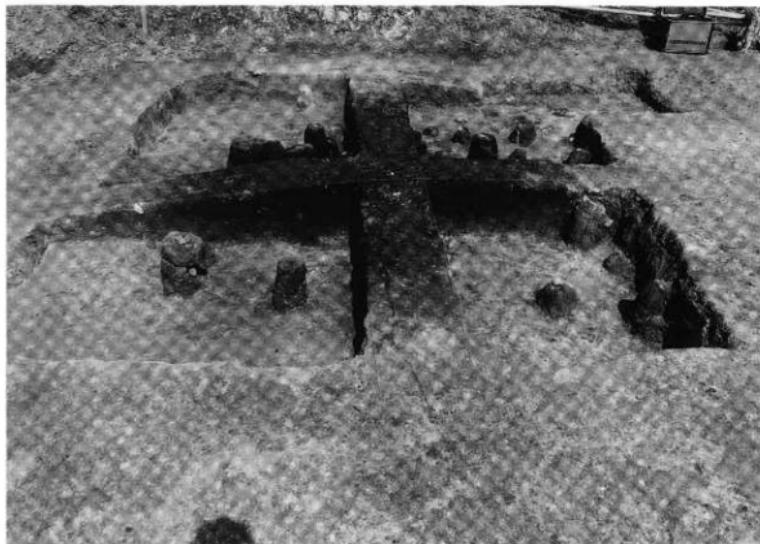


a. S I - 4 完掘状況（北東から）

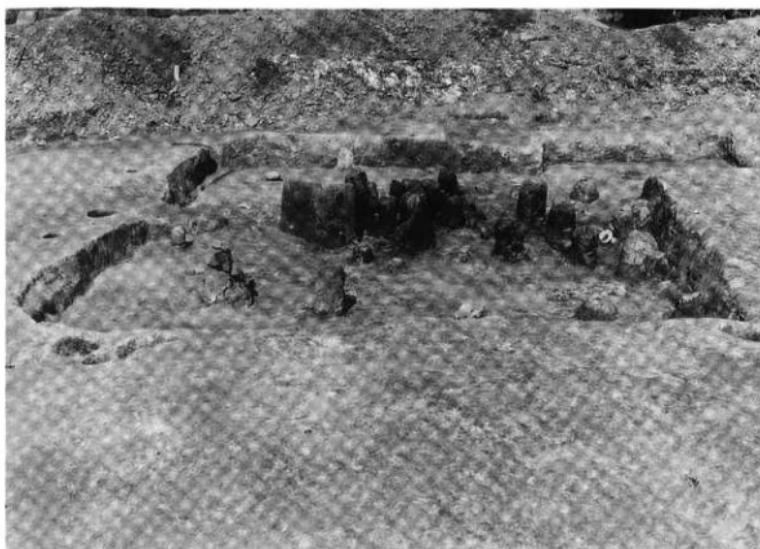


b. S I - 5 検出状況（南西から）

図版第11

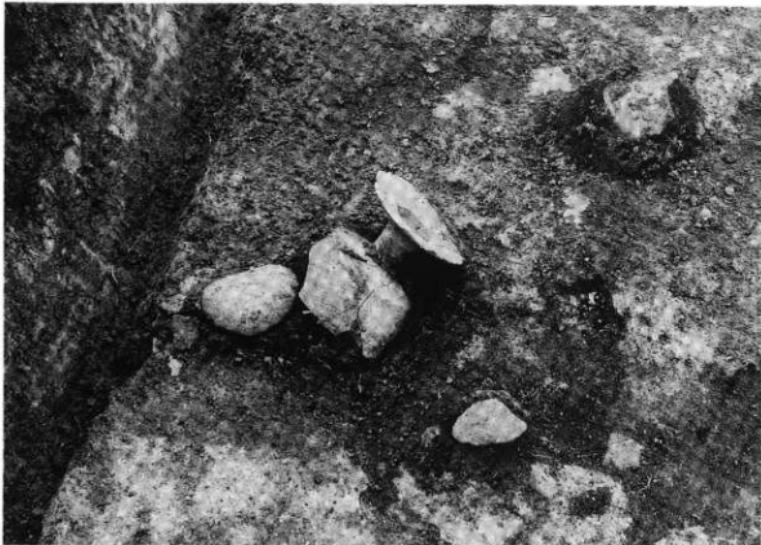


a. S I - 5 土層断面（南西から）

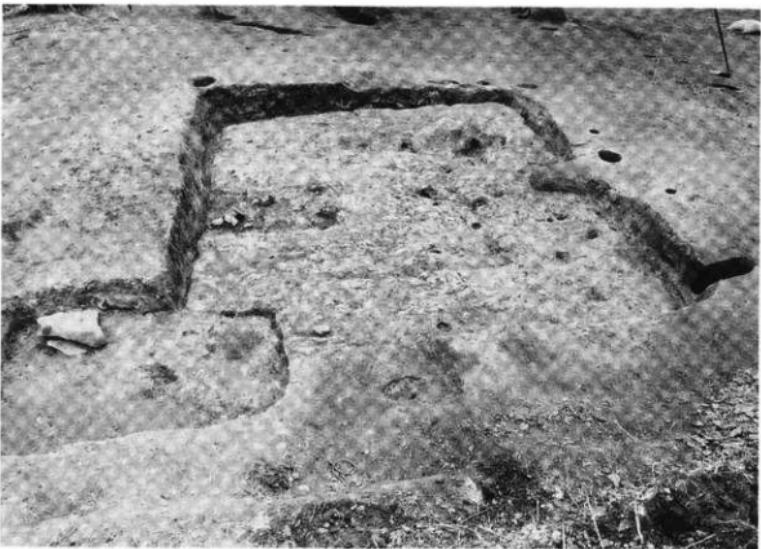


b. 同遺物出土状況（同）

図版第12

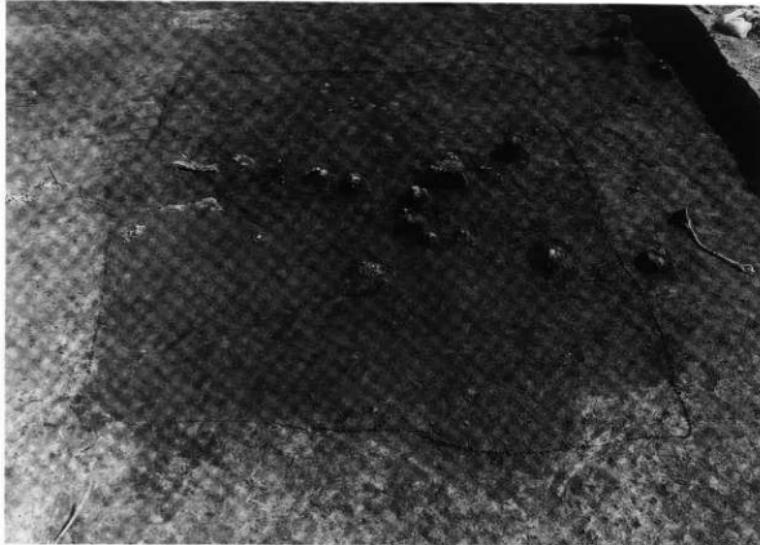


a. S I - 5 遺物出土状況（南東から）

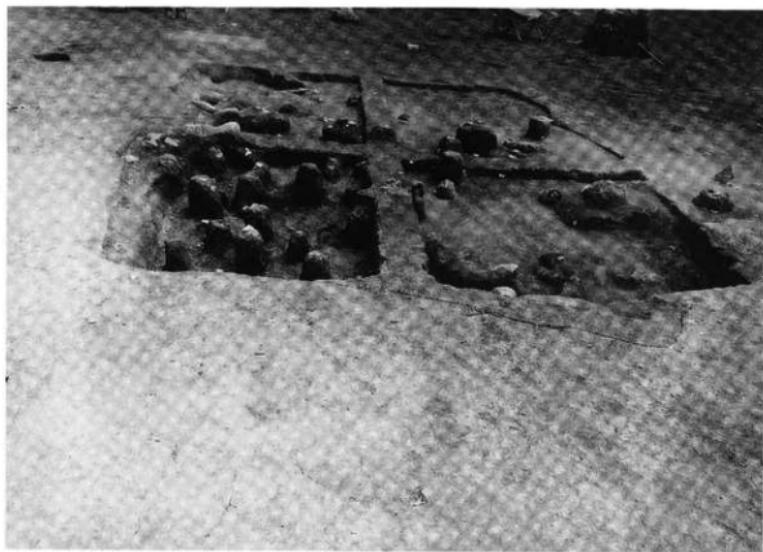


b. 同完掘状況（南西から）

図版第13



a. SI-6 検出状況（北西から）

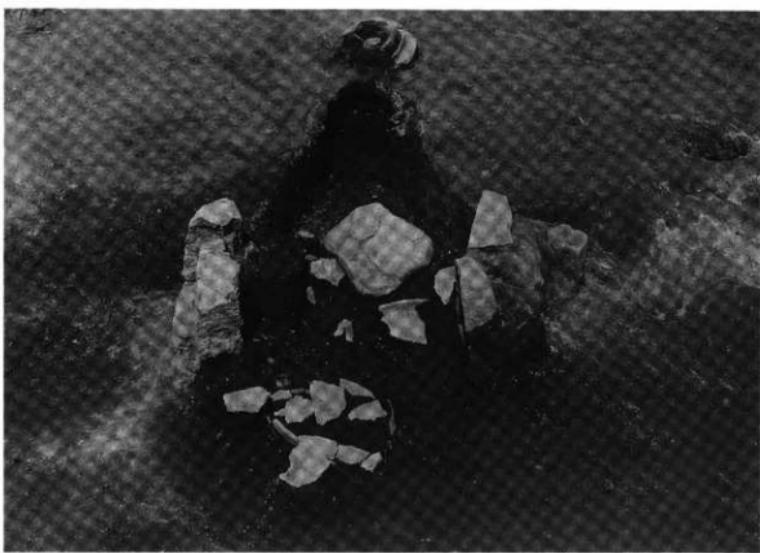


b. 同土層断面（同）

図版第14



a. S I - 6 遺物出土状況（西から）



b. 同遺物状況（南西から）

図版第15



a. S I - 6 竪石組状況（西から）



b. 同煙道（南から）